

国道9号線バイパス建設予定地内

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

- I -

51年3月

教育委員会

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

- I -

昭和51年3月

島根県教育委員会

## 序

この報告書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（松江国道工事事務所）の委託を受けて、昭和50年度に実施した国道9号線バイパス建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

島根県教育委員会では、今回の発掘調査に先立ち、昭和47年度から計西路線内の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、これをもとに関係方面と協議を重ねてきましたが、その結果多くの遺跡の保存がはかられることになりました。

本書は、松江市竹矢町所在才ノ岬占墳群（1号及び2号墳）、同矢田町所在平所遺跡及び安来市早田町大坪古墳群（3号墳）についてその調査結果を収めたものであります。

何分にも今回のような長期にわたる発掘調査には経験が乏しく、不備な点も多々あると思いますが、本報告を通して多少なりとも埋蔵文化財に対する理解と关心が高まれば幸いに存じます。

なお、本書を刊行するにあたりご協力をいただいた建設省中国地方建設局松江国道工事事務所をはじめ地元関係各位に衷心より厚くお礼申しあげます。

昭和51年3月

島根県教育委員会

教育長 中村芳二郎



## 例　　言

- 本書は、建設省中國地方建設局松江開道工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和50年度に実施した国道9号線バイパス建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査報告である。
- 調査地点は、松江市竹矢町、同矢出町所在の2地点と安来市早出町所在の1地点の3箇所で、それぞれ次のような組織・構成でこれを行なった。

遺跡名	所在地	発掘担当者	調査補助員
平所遺跡	松江市矢田町字平所	勝部 昭（文化課主事） 松本岩雄（文化課副課長）	二宅博士（県埋蔵文化財調査員） 鈴井伸二（愛知学院大学学生）
才ノ崎古墳群	松江市竹矢町字才ノ崎	勝部 昭（文化課主事） 松本岩雄（文化課副課長）	平野秀英（熊本大学大学院生） 鈴井伸二・浪花秀明 (以上愛知学院大学学生) 花谷 浩（京都大学学生） 細木啓義（岡山大学学生）
大坪古墳群	安来市早出町字大坪	川原和人（文化課主事） ト部吉博（文化課副課長）	

- 調査及び整理にあたっては次の方々からご指導・ご助言を賜った。（敬称略・順不同）

山 本　清（島根大学名誉教授）  
町 田　亨（奈良県立文化財研究所半城宮跡発掘調査部）  
吉 田　憲 二（　　同　　上　　）  
寺 村 光 晴（和洋女子大学教授）  
近 藤 齊 一（平安博物館助教授）  
浅 海 炎 二（島根大学教授）

- 遺物整理にあたっては発掘担当者、調査補助員以外に次のものが参加した。  
前島己基（文化課主事）　一山 典（国学院大学大学院生）　勝部 昭（広島大学学生）  
内山律雄（青山学院大学学生）　近藤加代子・井上山里・本間恵美子・吉野百合子（以上八雲立つ風土記の丘資料館）
- 掲載図面は、前島己基、ト部吉博、松本岩雄、三宅博士、花谷浩の製図にかかり、写真は松本岩雄、ト部吉博、二宅博士の撮影になるものである。
- 報告書の作成は、調査及び遺物整理に携った者の集団討議をもとにその内容を平所遺跡・才ノ崎古墳群については松本岩雄、大坪古墳群についてはト部吉博がとりまとめ、前島己基、松本岩雄がこれを編集した。
- なお、平所遺跡においては本書に収めたもの以外に埴輪窯跡1基を調査し、馬・鹿・人物・家形など多数の埴輪形象と埴輪円筒瓦を得ている。これについては整理・検討が不十分であるため、後日、関連調査を実施した上改めて報告する予定である。

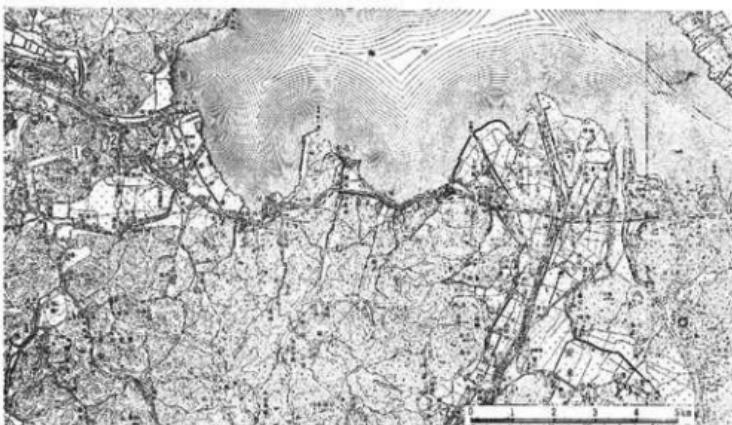


## 調査に至る経緯

国道9号線バイパスの建設と埋蔵文化財とのかかわりは昭和47年に遡る。すなわち、国道9号線の道路網整備に伴い、昭和47年5月26日付けで建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あてバイパス建設の基本設計資料として鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についてその照会があった。そこで昭和47年9月19日から9月29日まで地元教育委員会の協力を得て県教委文化課文化財保護主事門脇俊彦、県埋蔵文化財調査員内田才が現地踏査を行い、翌昭和48年には5月～6月にかけて安来市から八束東出雲町地域について再度これらの分布調査を実施した。

これらの調査結果等を踏まえ、建設省においておよそ3つのルート案が作成された。これによって安来市吉佐町から松江市乃白町におけるバイパス予定ルート及びその付近には131遺跡の存在することが明らかになった。

ついで昭和48年7月、松江市東地区の予定3ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があり、これに応えて県教委ではつきのような趣旨の回答を行った。(1)八束東出雲町から八雲村を通る南側丘陵ルートは東出雲町出雲錦の地域に多数の古墳が分布する。また(2)東出雲町から意宇平野の中央通り、大庭町へ抜けるルートは、史跡出雲国府跡や同出



調査対象地 (1. 平所遺跡、2. 才ノ峰古墳群、3. 大坪古墳群)

雲間分寺跡付古道など八雲立つ風土記の丘の主要部を横断し、好ましくない。これに対しても(a)東出雲町から竹矢町を通るルートは文化財保護の立場から最も被害の少ないルートである。ただし、この場合ルート内に含まれる中竹矢古墳については、これが全長約20mの前方後方墳であることから現状保存を計るよう、一削計画の手直しを希望する、という内容のものである。これをもとに中竹矢古墳を外した(a)の竹矢ルートが採用された。この間、10月には安来地区計画路線内の2500分の1の平面図新規図化に伴って現地立会の依頼があり、11月に立会調査を行なった。

明けて昭和49年7月、安来地区的清水一月坂間の提案ルートについて協議があり、文化課主事勝部船が現地を踏査した。その結果 (1)確認している遺跡については事前に発掘調査を実施すること、(2)発掘により貴重なものが発見された場合は保存に協力すること、(3)既に判明しているもの以外に遺跡が発見された場合は工事の施工にあたり改めて協議すること、という条件を付し、県教委としては一応提案ルートを容認することとなった。

そして、昭和50年1月22日付で県教委あて松江東地区と安来・清水一月坂地区の一部について発掘調査の依頼があり、昭和50年度当初予算で受託事業として700万円の調査費を計上した。事務的な手続きが整い、昭和50年7月14日に建設省中国地方建設局長と県教育長との間で契約書がかわされ、本年度は7月21日から松江市竹矢町才ノ峰古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の3遺跡についてこれの発掘調査を実施することとなった。

以下、それぞれ遺跡ごとに調査結果を報告することにする。

## 目 次

I	平所遺跡 1 (松江市矢田町字平所所在) .....	(1)
II	才ノ峰古墳群 (松江市竹矢町字才ノ峰) .....	(29)
III	大坪 3号墳 (安来市早田町字大坪) .....	(49)

# I 平 所 遺 跡

1

—松江市矢田町字平所所在—

1 調査の経過.....	1
2 位置と環境.....	2
3 遺跡の概要.....	4
4 検出遺構と遺物.....	6
(i) 穹穴式住居跡.....	6
(ii) 玉作工房跡.....	14
(iii) その他の遺構と遺物.....	22
5 小結.....	25

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置.....	2
第2図 調査区配置図.....	4
第3図 遺構配置図.....	5
第4図 1号住居跡実測図.....	7
第5図 1号住居跡出土土器実測図(1).....	9
第6図 1号住居跡出土土器実測図(2).....	10
第7図 1号住居跡出土遺物実測図.....	12
第8図 2・3号住居跡実測図.....	12
第9図 2・3号住居跡出土土器実測図.....	13
第10図 玉作工房跡実測図.....	14
第11図 玉作工房跡遺物出土地点図.....	15
第12図 工作用ピット実測図.....	16
第13図 玉作工房跡出土土器実測図.....	18
第14図 玉類未成品・原石実測図.....	19
第15図 水晶製玉類製作工程模式図.....	20
第16図 鉄製工具実測図.....	21
第17図 砕石・台石・土製品実測図.....	22
第18図 溝状遺構、N15・E13区出土土器実測図.....	23
第19図 N15・16-E16・17区、N15・E14区出土土器実測図.....	24

## 図 版 目 次

図版I-1 遺跡造形	内出土土器
図版I-2 遺跡近景	図版VI-1 玉作工房跡
図版II-1 丘腹部の遺構群	図版VI-2 工作用ピット
図版II-2 丘底部の遺構	図版VI-3 玉類未成品出土状態
図版III-1 1号住居跡	図版VI-4 第2ピット内土器出土状態
図版III-2 木製品等出土状態	図版VII-1 玉作工房跡出土玉類未成品と剥片
図版III-3 壁出土状態	図版VII-2 玉作工房跡出土鉄製工具
図版IV-1 1号住居跡出土土師器	図版VIII-1 玉作工房跡出土底石と台石
図版IV-2 1号住居跡出土土師器	図版VIII-2 玉作工房跡出土土師器
図版IV-3 1号住居跡出土上飯	図版IX-1 N15・16-E16・17区検出土器とその出土状態
図版IV-4 1号住居跡出土遺物	図版IX-2 N15・E14区検出土器とその出土状態
図版V-1 2・3号住居跡と溝状遺構	図版IX-3 N15・E13区検出土器とその出土状態
図版V-2 3号住居跡ピット内土器出土状態	
図版V-3 溝状遺構内土層堆積状況	
図版V-4 2・3号住居跡と溝状遺構	

## 1 調査の経過

本遺跡の調査は勝部昭、松本岩雄が担当し、二宅博上（県埋蔵文化財調査員）、堀井伸二（愛知学院大学学生）の協力を得て、これを行った。調査期間は昭和50年10月20日から明けて2月13日までの88日間を要した。

調査はまず本年度対象地区の立木伐採から始め、これと並行して縮尺200分の1の地形測量を行なった。引き続き調査対象地区全域に南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に $2 \times 2 m$ の方眼を組んでグリッドの1単位とした。なお、グリッドの設定にあたっては南北線、東西線の交点を基準に南から北に向ってN1、N2、N3……、同様に東西線も西からE1、E2、E3……とし、グリッド名はそれぞれ北東コーナーの交点をもって呼ぶことにした。

調査はまず丘腹部北側から実施し、ここで竪穴式住居跡1を検出、続いて溝状遺構と共に接して数カ所の竪穴状の落ち込みを検出するに至った。調査を進めて行く過程で、丘麓部の削平された地点に埴輪形象片の集積が認められ、これが埴輪窯跡であることが判明したので、11月12日から急拠この地点に調査の主力を注ぐことにした。窯跡は全長5.8m、幅1.5mあまりの傾斜式窯窓で、馬・鹿・人物・家等多數の埴輪片が出土した。これら多數の埴輪片は一部露出していたこともあるって非常に脆弱で、その取り上げにあたっては乾燥後バインダー-17を塗布して強化し、小片は極力現場で接合して採取した。そのため本窯跡の調査には12月21日までの40日間を費した。一方、丘腹部で検出していた遺構群については12月26日までに1号竪穴式住居跡の発掘を終え、年末年始は一時調査を中断した。明けて1月8日から調査を再開し、昨年検出していた丘腹部の溝状遺構を中心に発掘を進めたところ、これに重複して新たに竪穴式住居跡3棟の存在を確認した。そのうちの1棟は玉作工房跡で、水晶を玉材とし、いわゆる工作用ピットを備えるものであった。これらの遺構は複雑な切合関係を示し、かつ土層の変化が不明瞭で調査は難渋した。また、全く予想していなかった埴輪窯跡、玉作工房跡の発見に加えて冬期調査という悪条件が重なり、調査期間は当初予定より大幅に遅延し、結局現場での調査は2月13日までを要した。

出土遺物は取り上げと共に逐次ハシ立つ風土記の丘資料館にもち帰り整理を行った。整理には主として前島、松本、二宅、堀井があたり、一・山典、吉野百合子、近藤加代子、井上由里、木間恵美子諸氏の協力を得た。整理時間がきわめて短く、特に多數の埴輪形象の整理については十分に行なうことができなかつた。後日、改めて報告することにしたい。

なお、本遺跡の調査、整理にあたっては島根大学名誉教授山本清、奈良国立文化財研究所町田章、同吉田恵二、和洋女子大学教授寺村光晴、平安博物館近藤香一の諸氏から適切な指導、助言を受けた。また、島根大学教授浅海英三氏には埴輪窯跡の熱残留磁気測定を願った。

## 2 位 置 と 環 境

本遺跡は松江市の南部に展開する意宇川下流平野の北部丘陵地帯の一角にあり、その所住する地籍は松江市矢田町字平所 535 ノ 2 番地である。すなわち『出雲國風土記』に神名権野とある茶臼山（標高171m）の東北麓、南から北に派生する支脈の西側斜面に位置し、標高20~30mを計る。このあたりは国道9号線沿いの矢田からのがる谷頭水田の最も奥部にあたるところで、現在遺跡の西側は大半宅地化されているが、かつては狭隘な水田が営まれていた。

意宇川下流平野及びその周辺には縄文時代以来各種多数の遺跡がみられる。縄文遺跡としては、松江市竹矢町の法華寺前遺跡、才塚遺跡、竹矢小学校校庭遺跡、的場遺跡などが知られている。これらは、いずれも宍道湖と中海を結ぶ大曇川の河口に近い平野北側周辺に位置し、いわば波瀬かな内海の岸辺近くといったところに立地していることが注意される。弥生時代になると遺跡の数は、縄文時代より増加の傾向を見せる。すなわち竹矢小



第1図 遺 跡 の 位 置 (○印平所遺跡) 1:50000

学校校庭遺跡のように、縄文時代からひき続き展開していくもの以外に、新しく宮内遺跡・布田遺跡が形成される他、伝竹矢町出土という細形銅劍が平浜八幡宮に所蔵されており、これからすると平野の一角に船載の銅劍を保有する有力な首長をいただく集落のあったことが想定される。<sup>(註1)</sup> 顯著な前期古墳はみられないが、古墳時代に入ると5世紀以降、平野周辺の丘陵上には県下でも有数の前方後方墳や方墳が相次いで築かれ、その後の出雲地方の中心的位置を占める基礎がこの時期につくり上げられた。律令制下における出雲國府<sup>(註2)</sup>は平野の南辺部中央の大草町に置かれ、國府城の北東方の竹矢町には園分館、尼寺の両官寺が建立された。

平所遺跡は大略以上のような歴史的環境のもとに當まれているが、以下本遺跡と密接な関係をもつ古墳時代遺跡について主なもの若干を列記すれば次のとおりである。(番号は位置図と同一)

- 1. 来美古墳** 矢田町来美に所在する、いわゆる四隅突出型方墳で現在は消滅。一辺15m、高さ1.5mで主体部は7個の木棺直葬土壙が検出されている。供獻されていた土器は鍵尾II式の特徴を行するものである。<sup>(註4)</sup>
- 2. 鶏塚** 大庭町字茶臼に所在する方墳で一辺42m、総高10mあり、墳丘は二つの造り出しを伴い2段に築成されている。内部構造、出土遺物等については不明であるが、立地、墳形その他の5世紀代の築造とされている。<sup>(註5)</sup>
- 3. 山代ニ子塚** 鶏塚に近接する山代町ニ子塚に所在する。全長約90m、後方部幅56m、くびれ部幅約33m、前方部先端の幅約51mで後方部の高さ9m、前方部の高さ6.5mを計り、県下では最大の規模を誇る前方後方墳である。これも内部構造その他については未知であるが5世紀後半の築造と考えられるものである。<sup>(註6)</sup>
- 4. 御崎山古墳** 意宇川下流平野に突出した大草町字御崎の低丘陵上に位置する。墳形は推定50mの前方後方形を呈し、後方部幅23m、高さ3m、前方部幅17m、高さ2mの規模を有する。内部構造は全長約9mの片袖式の横穴式石室で、玄室内には切口を組合せた大小2基の横口式家形石棺が納められている。副葬品としては優秀な獣頭環頭大刀をはじめ各種馬具、鉄製品、須恵器類が発見されている。築造年代は、隣接地に所在する全長24mの岡田山1号墳と相前後する時期の6世紀末と考えられる。<sup>(註7)</sup>
- 5. 山代方墳** 山代ニ子塚に東隣して當まれた2段築成の方墳である。墳丘の周囲には土壙を伴う空塗がめぐり、これらを含めた規模は一辺55m、高さ6mを計る。内部構造は切口で構成した横穴式石室で、いわゆる石棺式石室に属するものである。石室は全長3.35m、奥室の高さ1.75mあり、奥室内には有縁屍床が置かれている。古くから開口している

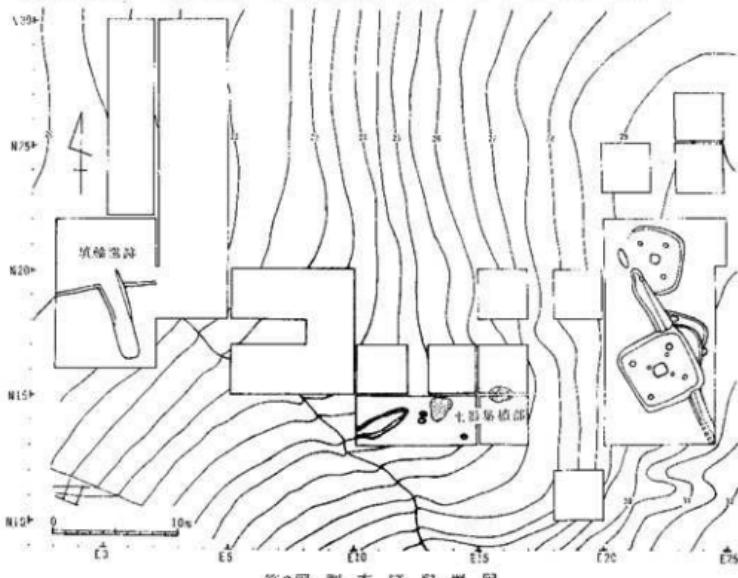
ため副葬品は不詳であるが、7世紀前半の製造と考えられる。  
(註8)

6. 百塚山古墳 章宇川下流平野の南部丘陵上に群在する古墳群で、主墳とみられる全長25mの古天神古墳（前方後方墳）を中心とし、総数50基あまりの小規模な円・方墳から構成されている。内容の明らかなものは少ないが概ね6、7世紀代に集中的に築かれた県下でも有数の群集墳である。

7. 十王免横穴群 平所遺跡の西南約400m、茶臼山の北東麓に構築された横穴群で、37穴から成る。複室構造のもの、玄室内に石棺を備えたもの、線刻壁画を有するものなどバラエティに富む各種横穴が調査されている。出土遺物は6世紀末から7世紀代の特徴を行するものが過半を占め、一部は8世紀に及ぶものも検出されている。  
(註9)

### 3 遺 跡 の 概 要

遺跡は低丘陵西南側の緩傾斜面一帯に位置し、標高は20~30mある。このあたりはかつて泥炭を探掘した矢田炭坑跡で、丘陵の各所に礫坑が残存し削平、掘削など著しい地形の改変を受けている。遺物が地表に散見されるのはこうした後世の擾乱によるもので遺跡発見の端緒もまたこれに起因する。今年度調査の対象となった区域は計画路線内に含まれる

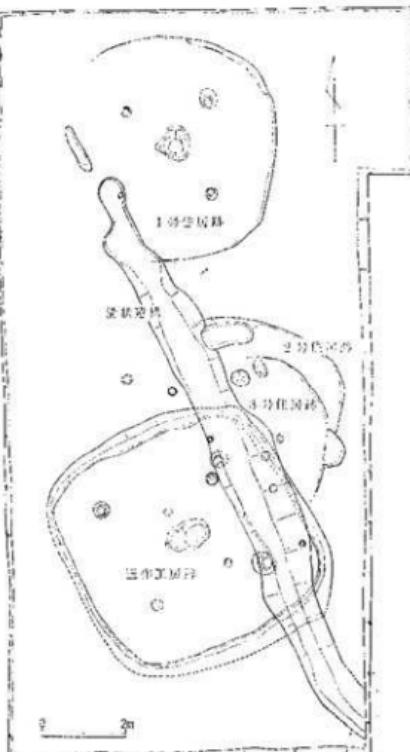


第2図 調査区配置図

## I 平所遺跡(1)

丘腹部傾斜変換点付近から斜面ないし丘頭にかけての一帯で、上方にみられる平坦部については今回調査を実施していない。したがって遺跡としての全体的なひらがり、規模等については今のところ不明と言わざるを得ない。

発掘調査の結果、検出された遺構は古墳時代前期の竪穴式住居跡3、玉作工房跡1、溝状遺構1と後期の納輪墓跡1である。このほか丘陵斜面において型界に關係するとみられる大形の古式土師器2、祭祀にかかわると考えられる遺構1も発見している。このうち竪穴式住居跡、玉作工房跡、溝状遺構は丘陵の中腹に位置し複雑な切合を示していた。しかもこれらは時期的に短期間に併まれており、各遺構の前後関係を把握するには困難をきわめたが、土居の変化と切合などから少なくとも2・3号住居跡、玉作工房跡(古)→溝状遺構(新)という関係を明らかにし得た。各遺構とも多寡の差はあるがいずれも古式土師器の出土をみている。出土上土師器は質量共に豊富で、その特徴は從来山陰の土師器の編年でいう鍵尾式の範疇に含まれるものである。ただし詳細に観察するとこれらには組成・形態・文様・製作技法等に相違が認められ、当該時期の古式土師器を再検討する上で重要な資料を提供するものであった。この丘腹部における遺構群のうち特に注目すべきは4号住居跡と仮称した竪穴から多量の水晶製玉類未成品・剥片・屑片および各種の攻玉工具が発見されたことで、施設の上からみてもこれが玉作工房跡と判断されるに至ったことである。しかも本工房跡は出土土師器の様相からすると、出土で確認されている玉作工房跡の中では最古のもので、



第3図 遺構記載図

かつ水晶を主な玉材とするなど興味あるさまざまな問題を提示している。

いま一つ注目すべきは、丘陵で埴輪窓跡が検出されたことである。このあたりはすでに後世の削平を受けており、分布調査の特徴はもとより調査に入った初期の段階でもここに遺構が存在することは全く予想していなかった。ところが調査中偶然に埴輪形象片が露出していることに気付き、調査を行ったところこれが埴輪窓跡であることが明らかになった。出土遺物については目下整理検討中であるが、今のところ埴輪馬3、埴輪鹿1、埴輪人物頭部3、埴輪家2、埴輪円筒1、土師器3が明らかになっている。埴輪の種類と組み合せおよび土師器の型式からするとこの窓跡は6世紀代の築窓と推定されるものである。

このように今年度平野遺跡で検出された遺構は発掘面積が狭少であったにもかかわらず、注目すべき各種遺構が存在し、出土遺物も豊富で、得られた成果は山陰の考古学界にいくつかの新知見を提供するものであった。以下、検出遺構についてその調査結果を記すこととする。

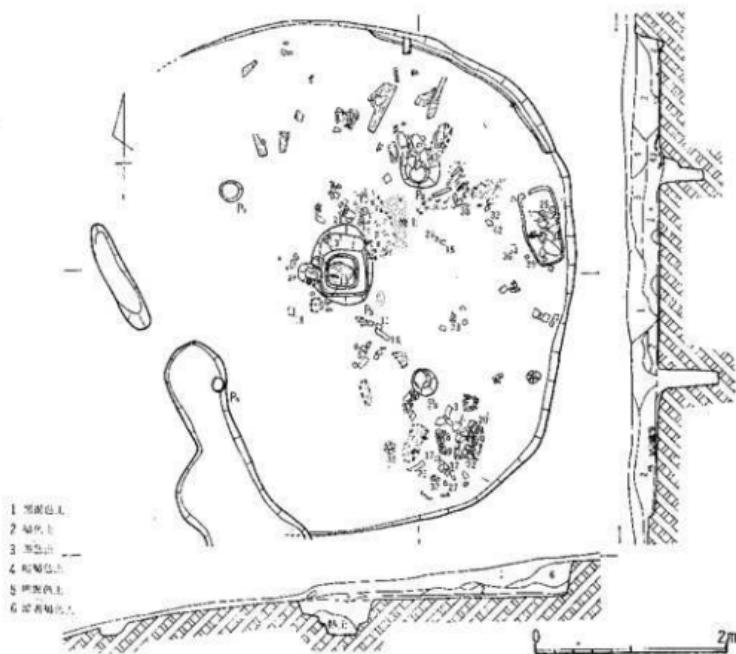
ただし、埴輪窓跡については山陰で初見のものであり、出土遺物についても製作技法その他検討すべき点が多くあるためここでは割愛せざるを得なかったことをお断りしておきたい。なお、これについては整理・検討が終了した時点で熱凍留磁気測定の結果をも併せあらためて正式に報告する心算である。

## 4 検出遺構と遺物

### 1. 壁穴式住居跡

#### (i) 1号壁穴式住居跡

構造 本跡は丘陵における遺構群のうち最も北側に位置する。丘腹部平坦部から斜面にかかる傾斜変換点に當まれているため丘陵谷側にあたる西壁はすでに消滅している。最も遺存状態が良好な部分は山側にあたる東壁と北壁の一端で、南壁は不明瞭であったが床面に貼られた粘土と覆土中に含まれていた木炭のひろがり具合などから大略これを把握することができた。残存部から推定すると、本跡は円形に近い隅丸方形プランを示し、その規模は南北5.3m、東西5.4mあまりとなる。壁内における七脛は大まかに言うと、床面から黒褐色土層、褐色土層という堆積状況を示していた。しかし、細かく観察すると粘性のある暗褐色土をブロック状に含むなど、長い間に自然に堆積したものとは異なるものようであった。壁は現地表面下10cmの赤褐色土層で検出され、壁面は70°～80°の傾斜をもって掘り込まれていた。確認し得た壁高は北壁30～25cm、東壁30～25cm、南壁20～5cmであ



第4図 1号住居跡実測図

る。床面の北東側壁沿いには幅15cm、深さ4cm、断面U字形の浅い溝がみられるが、これは壁際の全てをめぐらない。床面はほぼ水平で全面に厚さ5cmあまりの黄白色粘土が貼られていた。ピットは下表に示す5個が認められた。

ピット番号	上縁径	底径	深さ	備考
1	24	22.5	18	16
				50 ほほ基面に掘り込まれている。
2	42.5	42	16	15
				45 20cmの深さに幅5cmのテラスが半周する。
3	29	25	14	12.5
				61 ほほ基面に掘り込まれている。
4	15	14.5	14.5	11
				43 ほほ基面に掘り込まれている。
5	85	64	32.5	30
				37 25cmの深さに幅約10cmのテラスがめぐる。

(単位 cm)

このうち柱間は  $P_1 \sim P_2$  が  $1.97m$ 、 $P_2 \sim P_3$  が  $2.12m$ 、 $P_3 \sim P_4$  が  $2.10m$ 、 $P_4 \sim P_1$

が2.00mではほぼ等間隔に配され、それぞれ対称的位置に穿たれていた。この4個は上屋を支えるための主柱穴とみてよからう。床面中央で検出されたP<sub>6</sub>は2段掘り込みの大形方形ピットで、周囲に多くの土器片を伴い、内部には灰白色の粘土塊が認められた。規模・形状およびピット内における上層の堆積状態などからすると、これは柱穴とは認め難いもので、機能は明らかではないが、日常生活を営む上で必要とされた重要な意味を持つ施設であろうか。同様な構造は最近調査された安米山田町叶谷遺跡などでも確認されているが、その性格については今後さらに多くの類例を俟って解明すべきものであろう。

出土した遺物は、炭化木質材・古式土師器などで、このうち特に注意されたのは住居跡内に多量の炭化木質材の集積が散見されたことである。これは一見火災を受けた壁穴のように観察されたが、調査の過程ではそれを十分確証するには至らなかった。ただし、P<sub>2</sub>における古式土師器の瓶およびP<sub>2</sub>脇辺の土器片のあり方などから、本跡は不意の事故により焼棄されたものと考えられた。

また七器の出土状態もこれを裏付けるようなあり方で、それぞれまとまりのある状況を示していた。なかでもP<sub>2</sub>に接して出土した瓶は焼棄時の位置そのままで押しつぶされた状態にあった。住居跡内における日常生活の一端を知る上で貴重な実態を示すものと言えよう。

このほか東壁際から山陰ではこれまで報告例のない盆形木製品が出土した。すでに炭化し、内部には粘土塊とともに土器片が認められた。

なお、本跡の南西隅から西壁の一部にかけては後記する溝状遺構と重複していたが、後世の削平などでその前後関係については確認できなかった。

**遺物** 発見された遺物には、各種土師器のほか鉄製品、木製品、砥石、自然遺物などがある。

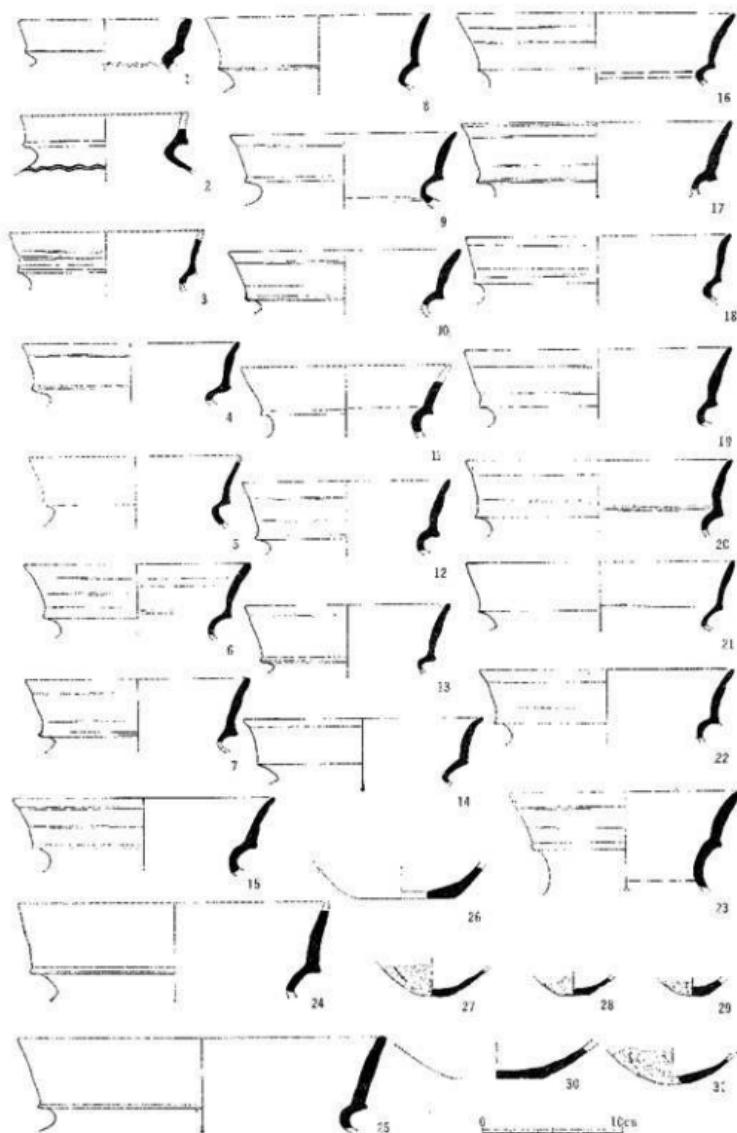
遺物の主体を占める土師器は、壺、甕、鉢、高杯、器台、瓶など各器種にわたるものがあり、その量も豊富であったが、完形に復し得るものは瓶1のみである。

壺形土器と考えられる第5図23を除くと甕・甕類は形態上大差の認められないもので、これらは全て複合口縁を有するが、口縁径から次の5種に大別できる。

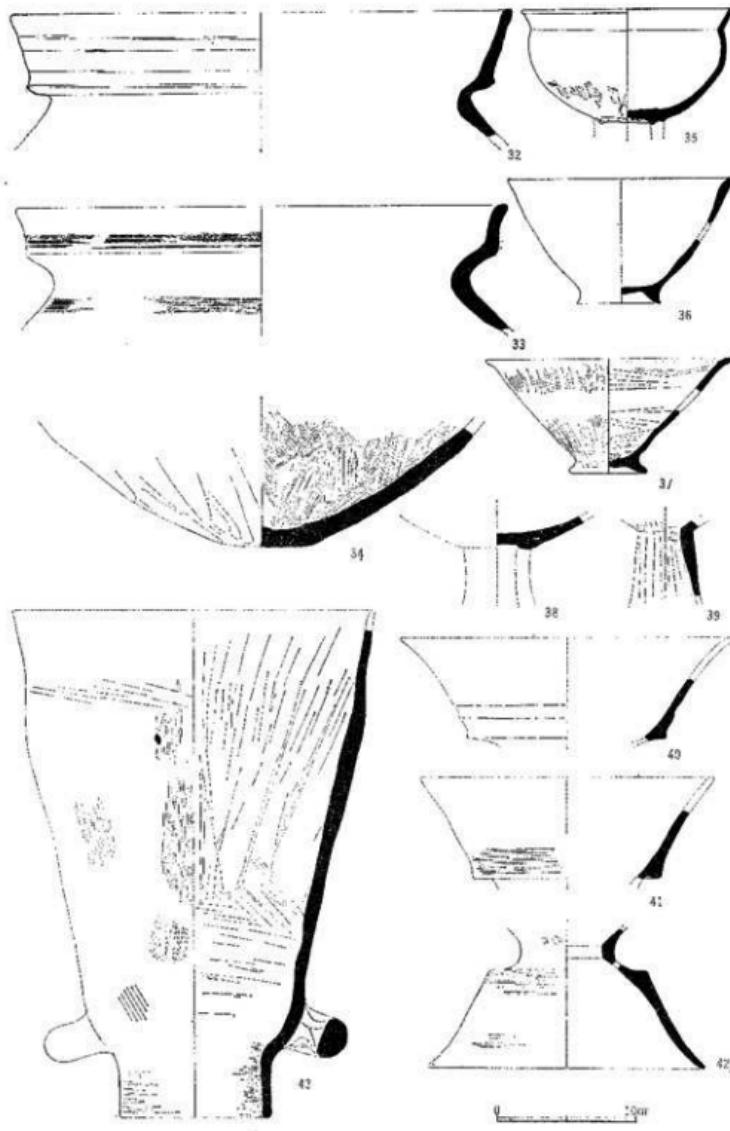
その1種(1~3)は口径11.9~13.8cmの小形品で、1・2は器肉が厚い。1は口縁部がやや外反するのに対して2はほぼ直線的に立ち上がり、肩部に2条の横擗波状文がめぐる。

2種(4~13)は口径14.0~16.4cmで、4、9を除くと他はいずれも外傾する口縁部をもち、なかには口縁端がさらに外反するものもある。詳細に観察すると口縁部内面の立ち上り基部には調整の際指彫で強く押しなでたと見られる凹面のあるもの(12、13)とそうで

1 平所遺跡(1)



第5図 1分住居跡出土土器実測図(1)



第6四 1号化岩跡山土器実測図(2)

ないものがある。

3類(14~22)は口徑17.0~19.7cmのもので器内は全般的に薄い。口縁端が強く外反する14の他は全て外傾する口縁部をもつ。また、2類と同様口縁部内面には基部に凹面の見られるもの(17、19)がある。

4類(24、25)はやや大形で2個体あり、口徑はそれぞれ22.1cmと26.2cmを計る。ともに口縁部立ち上り幅の広いのが特徴で、24はほぼ垂直、25は外傾して直線状にのびる口縁部を持つ。

これらに伴うとみられる底部は26~31に示すように小形品は丸底に近いが、やや大形品はアクセントの不明瞭な平底である。

5類(第6図32、33)としたものは口徑35.5~35.2cmの大形佔で、32は直線状に外傾し、33は口縁部幅が短く、縁端部がさらに外反するものである。33は器面の風化が著しいが口縁部と肩部に横状工具による平行沈線文が見られ、本跡出土の盃、甌類のなかでは先の1類2とともに数少ない文様を有するものである。5類の底部(34)は下腹部からゆるやかに縦曲する丸味の強いもので外側へラ磨き、内面削毛目調整がなされている。

これら盃、甌類は、いずれも口縁部の内外面にヨコナデ、頸部以下の内面に顕著なハラ削りがなされている。

次に脚付鉢としたもの(35)は「く」の字状に屈折する口縁部をもち、体部は球形に近い形態をとる。底面の剥離痕からすると、脚あるいは台がつくものとみられる。体部外面は削毛目あとハラ磨き、内面はハラ磨きで調整する。小形の台付鉢(36、37)には、体部が内側し、口縁端が肥厚してやや外反するもの(36)と、体部が直線的に外傾し、口縁がさらに外反するもの(37)とがある。36は内外面共にハラ磨き、37は外側削毛目、内面ハラ削り調整がなされている。器台(40、41、42)はいわゆる鼓形の器台で、筒部が短く器受部、脚台部がともに左右に大きく開く式のものである。器面の風化が著しく不明瞭であるが、器受部、脚台部外面に一部最密な平行沈線文を施したものがみられる。

瓶(43)は口縁部に向ってほぼ直線的に開く円筒状のもので、下腹部にくびれを有し、半蝶状の把手が対称的な位置につけられている。注意すべきは把手が下方を向き基底部近くに付けられ、くびれがみられることで、この土器の具体的な使用法を知る上で示唆に富むものである。外側は削毛目、内面はハラ削りがなされている。

このほか高杯(38、39)の脚部片などもある。

これら1号住居跡出土の土師器は、胎土中に若干の小砂粒を含み焼成は比較的良好で、黄褐色ないし赤褐色を呈するものが多い。

鉄製品としては、残存長4.3cmの板状鉄器片

1(第7図2)が出土している。用途不明。

東壁際から出土した盆形木製品(図版III-2)

は炭化が著しく、原形のままで採取できなかったが、出土時の計測によると、長さ80cm、幅40cmで、底は遺存していない。

礫石(第7図1)は盆形木製品の上から土器片

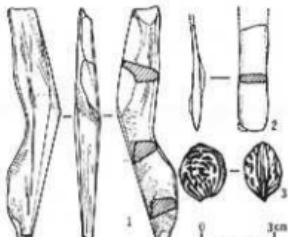
とともに出土したもので、長さ9.4cm、幅1.3cm、

厚さ0.6cmあまりある。全面にわたって使用痕がみとめられるが、石質は不明。

このほか、自然造物として梅の種子とみられるもの(3)が出土している。

(e) 2・3号堅穴式住居跡

構造 1号住居跡の南約1.5mから重複して検出された。両者の位置関係は2号住居跡内に接して3号住居跡が営まれ、ともに北東隅の一部を残すのみで大半は溝状遺構および後世の削平により消失していた。これらは後に記す玉作工房跡・溝状遺構と複雑な切合関係を示していたが、堆積土層の変化からすると、少なくとも2・3号住居跡(古)→溝状遺構(新)という関係は明瞭であった。しかし、両堅穴式住居跡は極めて近接して営まれていたため、その先后関係については明確にこれを把握し得なかつた。2・3号住居跡内には黒褐色土層が堆積し、2号住居跡の床面は現地表面下55cmで、3号住居跡の床面はそれより10cm深く掘り込まれていた。確認し得た壁高はいずれも10cmあまりで、戸構はともに見られなかつた。2号住居跡内では北壁沿いに120×55cm、深さ15cmの不整規円形ピット1、3号住

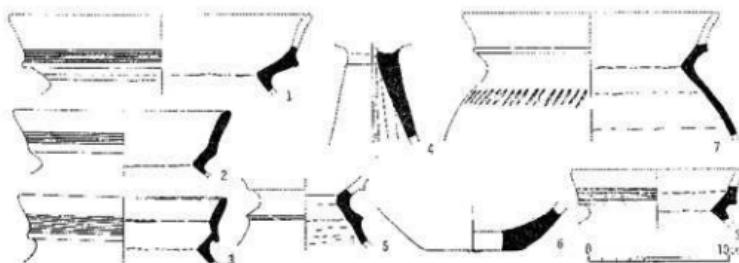


第7図 1号住居跡出土物実測図



第8図 2・3号住居跡実測図

## I 平井遺跡(1)



第9図 2・3号住居跡出土土器水削図

層跡では内部に石と土器を伴う径40cm、深さ12cmのピット1、さらに不整形の2個のピットが検出された。これらは、位置・形状・規模その他から、いずれも柱穴とは考え難いものであった。なお、両窓穴と重複関係にある溝状遺構内およびその西側で6個のピットを検出している。これらのピットは2・3号住居跡に付随する可能性も考慮されるが、調査の過程ではその関係について確認することができなかった。

出土遺物は2号住居跡で若干の古式土師器片、水鉢片、鉄製工具、また3号住居跡では古式土師器片が検出されたにすぎない。このうち2号住居跡の出土遺物は南端して玉作工房跡が背まれていることから、すべてが本跡に伴うものかどうか疑わしく、玉作工房跡の関係遺物の可能性が強い。

**遺物** 2号住居跡出土の土師器には壺・甕類、高杯、器台などがある。

壺・甕類はいずれも複合口縁を行るもので、口径20cmのやや大形のもの（第9図1）と、口径15cm前後のもの（2、3）がある。口縁部外面には櫛状工具による平行沈線文がめぐるが、2・3はこれが口縁部の下半にのみ施されていることが注意される。内面頸部以下は全てヘラ削り、底部（6）はアクセントの不明瞭な平底である。

器台（5）は、筒部から脚台部にかけての破片で、筒部が短く器受部と脚台部が左右に大きく開くいわゆる鼓形器台の特徴をよくとどめている。脚台部内面の調整はヘラ削り。

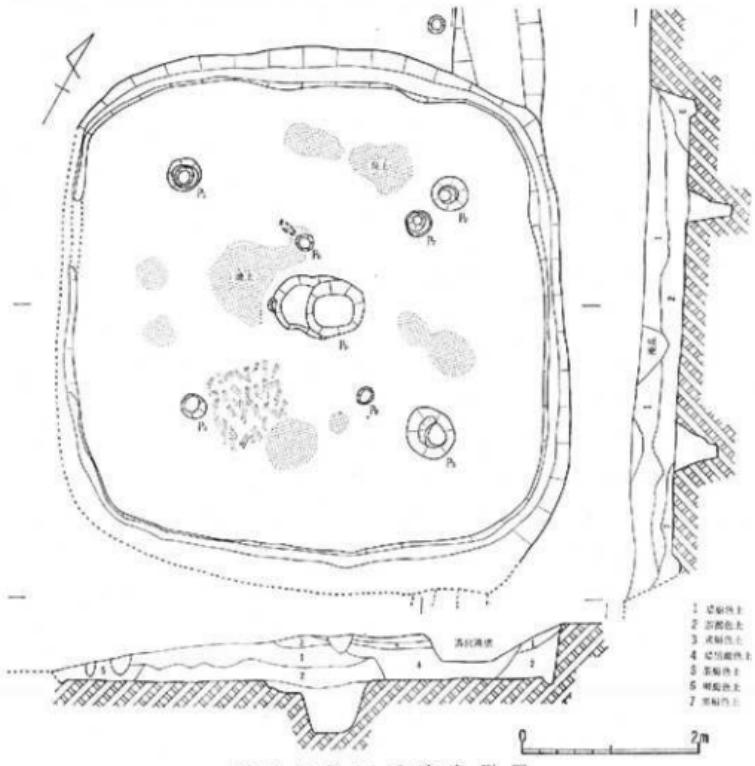
高杯（4）は筒脚部片で、外面はヘラ磨き、内面にはしづり目がみられる。

3号住居跡から発見された土師器壺・甕類も複合口縁をもつものである。7は筒部に櫛状工具による列点文がめぐらされ、8は口縁部外面に平行沈線文が施されている。ともに内面頸部以下に頗るなヘラ削りがみられる。

これら2・3号住居跡出土の土師器は、胎土中に小砂粒を若干含み、焼成は全般に良好で黄褐色ないし赤褐色を呈す。

## 2. 玉作工房跡

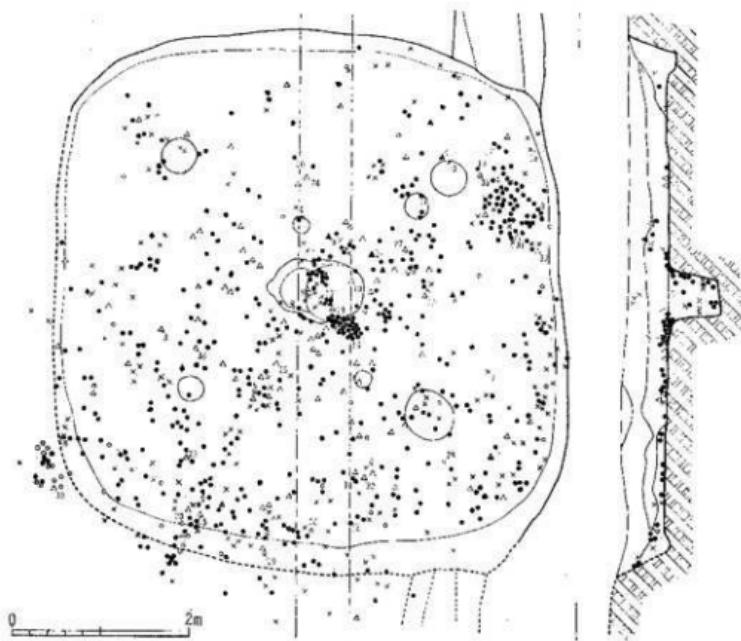
構造 丘度における遺構群のうち最も南側に位置し、2・3号住居跡及び溝状遺構と切合関係を示していた。当初1・2・3号と同様な竪穴式住居跡と考え、4号竪穴式住居跡と仮称したが、調査の過程で玉作工房跡であることが判明した。工房跡は付近検出遺構のうち最も深く掘り込まれており、その遺存状態は北壁と東壁については良好であったが、斜面にあたる西壁はすでに消滅し、南壁はきわめて不明瞭であった。しかし、壁に沿ってめぐらされた周溝が概ね完存していたことから、工房跡全体の規模・平面形を知ることができた。すなわち、平面形は典型的な隅丸方形プランを呈し、東壁長5.45m、西壁長5.50m、南壁長5.65m、北壁長5.50mを計る。工房跡における土層の堆積状況は最近の造成で盛られた最上層の暗黄色28cmを除くと黒色糞植土10cm、黒褐色土28cm、暗褐色土20cm、茶褐色土30cmとなっており、現地表面より深さ1.4mで暗黄色の地山の床面に達する。本跡と切



第10図 玉作工房跡実測図

## I 平所遺跡(1)

合関係にある溝状遺構はこのうち暗褐色土層まで掘り込まれていた。これに対して工房跡は表上層にあたる黒色腐植土から3層目の暗黄色地山面で検出され、壁は70°～80°の傾斜で掘り込まれていた。壁高は最も遺存状態の良好な東壁で68～54cm、北壁で47～10cmである。床面には壁沿いに幅15cm、深さ5cmの断面U字形の溝がめぐる。なお、最近報告例が増えている周溝内における小ピットは検出されなかった。床面はほぼ水平で全般によく踏み固められ、炭化物の集積2ヶ所の他、各所に火を受けた部分がみられた。火の使用のものつ意味は明確にできなかったが、例えば、攻玉の際に原石の剥離を容易にするため加熱した時の痕跡などの場合が考慮されようか。床面上には工作用ピットを含め大小8個のピットが穿たれていた。個々については別表に示す通りであるが、うちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はほぼ対称的な位置にあり、かつその形状・模様等から主柱穴と考えられるもので、柱間はP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub> 3m、P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub> 2.7m、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub> 2.8m、P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub> 2.6mで概ね等間隔を示している。



第11図 工作工房跡 遺物山土 地点図

●水器、○碧玉、△銅製工具、▲紅石、×十層の山土地点を示す。断面図は工房跡中央(南北)の幅60cm範囲内における遺物の東西分布を表す。

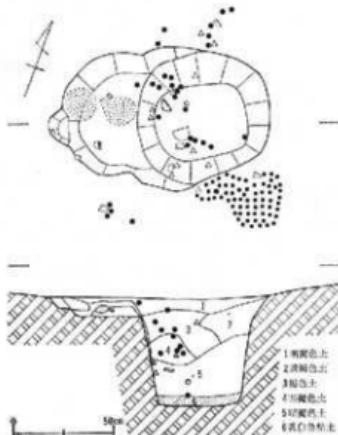
ピット番号	上縁径	底 縄	深さ	備 考	
1	40	38	16	15	48.5 15cmの深さに幅7cmのテラスがめぐる。
2	42	40	14	12	48.5 諸土に土師器口縁部を埋蔵。
3	60	55	25	22	46 柱痕が上側に認められた。
4	28.5	26.5	19	18	47 ほぼ垂直に掘り込まれている。
6	21	19	14	13	5 ほぼ垂直に掘り込まれておりきわめて浅い。
7	30	29.5	10	10	47.5 深さ30cmに幅8cmのテラスがめぐる。
8	21	18	15	12.5	5 ほぼ垂直に掘り込まれておりきわめて浅い。

(単位 cm)

床面中央で検出された二段掘りのP<sub>5</sub>は長径110×短径65cm、深さ床面から57.5cmの不整規四角形のプランを呈するもので、西側に深さ10cmの浅いテラスを伴う。注意すべきは基底部に厚さ5cmの乳白色粘土が貼られ、上部のテラス面には厚さ3cm余りの暗褐色砂が認められたことである。基底部の粘土は目振り用のものと考えられるもので、こうした施設は、いわゆる玉作工房跡特有の工作用ピットに該当し、攻玉の過程で必要な研磨・穿孔などの際の水の使用と密接不可分な施設とされているものである。ピット内には攻玉の過程で生じた水晶剥片・屑片や錐状の鉄製工具

などがみられ、ほかに若干の土師器片も認められた。これらの多くは床面およびテラス面から落ち込んだ状態にあった。また、ピットの上縁には一部に水晶剥片・屑片が集積していた。こうした出土状態は本ピットの工作における機能の一端を示すものであろう。

床面に残されていた遺物もまさに玉作工房跡と言うにふさわしいものであった。すなわち、堅穴の床面にはおびただしい数の水晶剥片・屑片が認められ、特に工作用ピットの周辺、及びP<sub>5</sub>の東側においてこれが集中的に検出された。これらの中には水



第12図 工作用ピット実測図

晶製玉類の荒削・研磨・穿孔工程の未成品が含まれ、それと共に玉磨砥石・鉄製工具類も出土した。このほか僅少ではあるが碧玉・赤瑪瑙の小片も出土している。なお、床面上層の茶褐色土層にも多くの水晶剥片・屑片が含まれていたが、窓穴外にはほとんど遺物のなかったことが注意された。

具体的な時期を知る資料としてP<sub>2</sub>内から盛形土器等を得ている。

**遺物** 工房跡内から発見された遺物には古式土師器のほか、各種多數の玉作関係遺物がある。

土師器は壺・甕類、長頸壺、器台、脚付盤、高环など各器種にわたるものがあるが、完形に復し得るものはない。

土師器のうち量的に最も多い壺・甕類は、いずれも複合口縁を有するもので2種に大別できる。すなわち、1類は山陰地方の当該時期に多くみられる5の字形の複合口縁を有するもので、2類は頸部がゆるやかに屈曲し、大きく外反して立ち上る口縁部をもつものである。

1類は、製作技法、文様、形態上大差はみとめられないが、口縁径からさらに3つに分けられる。

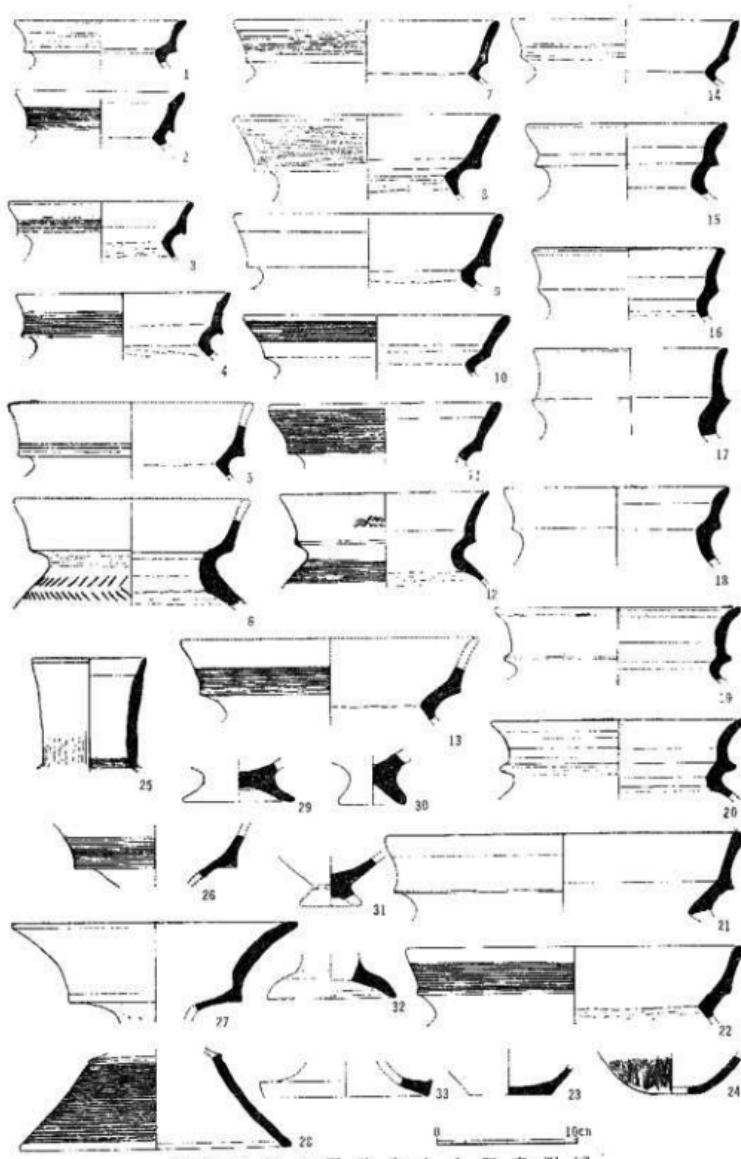
その1は、口径12.2~13cmの小形品（第13図1~3）で、頸部がくの字状に屈折し、口縁部はやや外反して立ち上る。1・3は口縁端が丸味をもつが、2は口縁内面にヘラ磨きによる稜がみられる。2・3は口縁部外面に櫛状工具によるやや太い平行沈線文がめぐる。

1類の2は、口径16.7~20cmの中形品（4~14）で量的に最も多い。口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上り、口縁端はやや肥厚し丸味をもつ。全般的に器肉が厚い。口縁部外面に平行沈線文のめぐるものが多く、工具はやや太い櫛齒のものが主体をなす。6のように肩部に絞杉状の刺突文を施すものもある。なお、12は器肉が薄く、口縁部が外反してやや尖りぎみの口唇をもち、他に比べやや趣を異にすることが注意される。

1類3は、口径25cm前後のやや大型品（21、22）である。口縁部はやはり厚くつくられているが、細かく言うと口径に比し口縁部幅のやや狭いのが特徴的である。

これらに対して2類は、頸部がゆるやかに屈曲して大きく外反する複合口縁をもつもの（15~20）で口径14~18.2cmを計る。全体に厚いつくりで、口縁部外面の立ち上り基部が鈍く突出あるいは突帯状に張り出すのが特徴となっている。口縁部は外面ヨコナデ、内面ヘラ磨きがなされ、文様は全くみられない。

これら壺・甕類は頸部以下の外面に刷毛目あるいはヘラ磨きがみられ、内面は例外なくヘラ削りがなされている。底部には、内面が丸味の強い比較的しっかりした平底（23）と



第13圖 玉作工房跡出土土器實測圖

丸底に近い不安定な平底（24）がみられる。

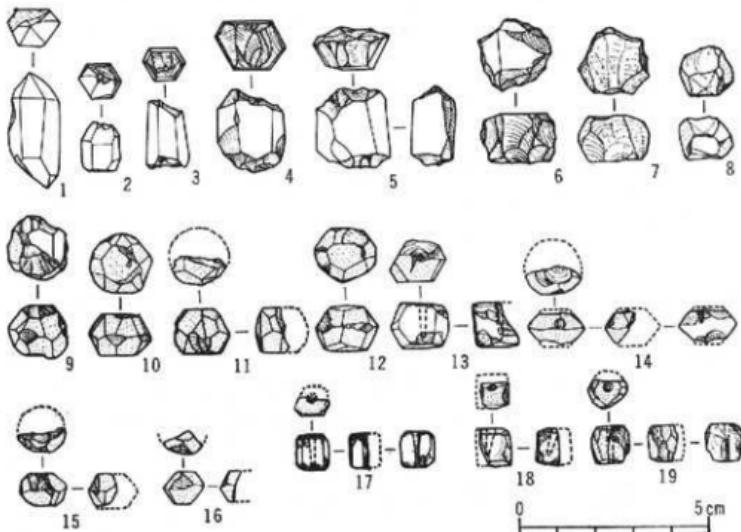
長頸壺としたもの（25）は、口頸部の破片から推定したもので内外面ともにヘラ磨き調整がなされている。胎土は細かく、他のものに比してよく精選され、内外面共に丹が塗られている。

器台（26、27、28）は梯形台を上下に接合した鼓形の器台で、器受部および脚台部の形状は断面5の字形の複合口縁に類似している。上下をつなぐ専門は中央で細く縮約するものとみられ、先の1号住居跡出土のものより細長い式になるものと考えられる。器受部、脚台部の外面に平行沈線文をめぐらすもの（26、28）とそうでないもの（27）があるが、内面の調整は器受部ヘラ磨き、脚台部ヘラ削りがなされる。

このほか、高杯、盤あるいは鉢などとみられる脚部破片も出土している。

玉作関係遺物には玉材として水晶質材816、碧玉質材106、赤瑪瑙質材2、計924の未成品、剥片、屑片及び工具として鉄製品、砥石、台石、土製品などが出土している。

玉材のうち主体をなすのは水晶質材である。完成品は出土していないが、成品に近い穿孔工程のものをみると、算盤玉状のものと丸玉状のものの2種がある。このうち量的に多いのは算盤玉状のもので、原石のほか各種工程のものがある（第14図）。それによると原石



第14図 玉類未成品・原石実測図

採取後、荒削一調整一研磨一穿孔一仕上げの過程を経て完成していることが知られる。煩瑣になるため、ここでは製作工程ごとに説明を加えることとする。

荒削工程（2、3、4）は採取原石を分割することで、水晶結晶体の上下尖端部を打ち欠き、これによって六角柱を作出する工程である。これは水晶製玉類の製作において共通してみられる原石分割法である。

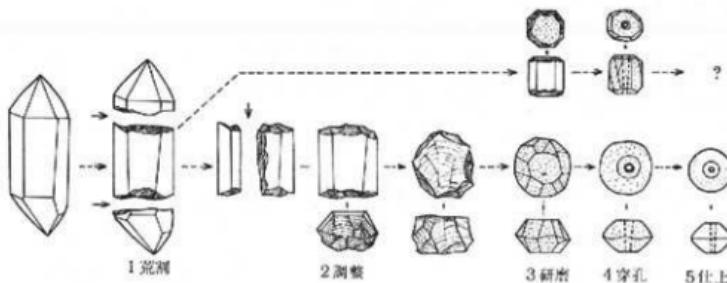
六角柱状に作出された荒削未成品は次に打撃あるいは押圧剥離により上下面に調整が加えられ、さらに縦方向に側面が剥離されて、側面調整にはいる。この場合、小形の結晶体については、上下面調整のち直ちに側面調整がなされている。この段階までが調整工程（5～7）である。

こうして作出された扁平な未成品は研磨工程（8～12）に入り、基本的にまず側面から順次磨かれ、上下面へと及ぶが、その順序は必ずしも一定していない。この段階で概ね算盤玉状の形状が作り出される。

穿孔は荒磨きの段階でなされるものもあるが、多くは研磨工程を経たのち実施されている（13、14）。なお、この工程の未成品は僅少であるが、得られたものは全て一向向穿孔で、大きさは径1.5cm、厚さ1.1cmあまりある。また穿孔途中の破損品を観察すると、孔底が尖らず平坦になっていることから、先端の平らな鎌が用いられたものと推定できる。

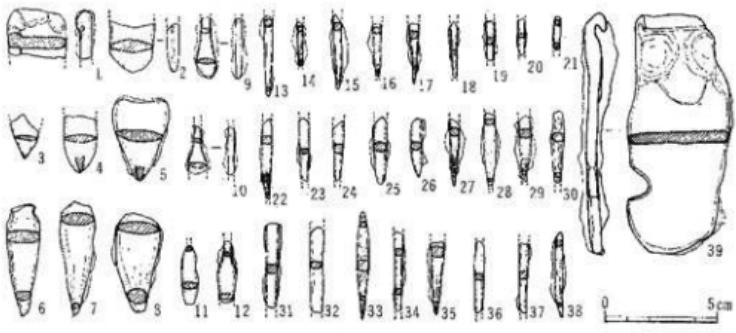
これに対して丸玉状の未成品（17～19）は次のような工程をとっている。すなわち、荒削工程の後直ちに上下面の研磨・穿孔工程に入るものが多く、先の算盤玉状品にみられたような側面調整を経ないものがある。穿孔工程のものをみると径0.89cm、厚さ0.83cmあまりで、算盤玉状品に比べやや小さい。側面調整のみられないもののあることは、結晶体と完成品の大きさが近似し、側面の調整を行う必要のなかったことと関係があろう。

完成品の出土はみていないが、これらはいずれも穿孔終了のものについて再度入念な研



第15回 水晶製玉類製作工程模式図

## I 平所遺跡(1)



第16図 鉄製工具実測図

磨が加えられ、成品として仕上げられたものと考えられる。以上、水晶製玉類の製作過程を模式的に示すと第15図の通りである。

このほか、本跡では僅少ながら碧玉質材、赤瑪瑙質材もみられるが、いずれも剝片、屑片のみであった。成玉をなしたかどうか明らかでないが詳実として報告しておきたい。

工具としての鉄製品は、刃作用ピット周辺を中心に多数出土し、その総数は109点におよぶ。これは一工房跡内における鉄製工具の出土量としては今のところ他に比肩するものがない。これらはいずれも銹化が著しいが、葉状、ケンガネ状、錐状のものが主体をなす。

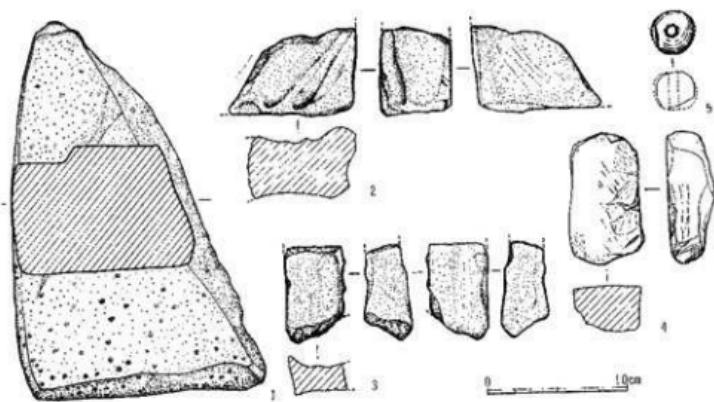
葉状工具とみられるものは23点あり、形態上2種に分けられる。

その1は、板状で刃部が剣先状を呈するもの（第16図1～5）で、最大幅2.5cm、長さ5cm、厚さ0.5cmあまりあり、なかには頭部の折れ曲ったもの（1）もみられる。

その2は長さ4～5cm、最大幅1.5～2cmのもの（6～8）で葉形をなす。頭部の断面は長方形ないし橢円形を呈し、刃部は先細りで断面橢円形を示す。

ケンガネ状としたものは、尖端の鉄鍔に近い形状をもつ（9～12）が、先端部は尖らない。詳細は明らかでないが、木柄を着装し調整などに使用したものであろうか。

錐状品（13～38）は鉄製工具のなかで最も多く62点ある。茎の断面は方形を呈するものが多く、先端は先細りで断面円形をなす。残存長は最も長いもので3.8cmある。銹化が著しく、本来の形状は不明な点が多いが穿孔工程未完成品をみると、刃部は実測図より今すこし細く、先端部は平坦になっていたものと推定される。なお、1点であるが径2.8cmで中央に0.6cmの小孔を有する球形の上製品（第17図5）を得ている。これはたとえば、錐と直接不可分な関係をもつ勢車と考えられるものであろうか。このほか、扁平な板状品と上



第17図 磨石・台石・土製品実測図

部に折り返しのみられる鉄製品(39)が出土している。工具の一類とみられるが用途は不明。

砥石(第17図2~4)は4点出土している。このうち玉磨砥石は2点あり、いずれも欠損部で底面が浅くU字形に凹む砂岩質の筋底である。ともに効果的に使用され、2には上面に3条の溝、側面及び下面には浅く凹んだ幅の広い砥面がみられる。4は鉄製工具用の道具砥石で長さ9.4cm、幅5.2cm、厚さ3.1cmあり、凝灰岩質。底面として一側面が利用され、その横断面はわずかに凸面をなす。

これらは、玉磨砥石が工作用ピットの北側、道具砥石がP<sub>2</sub>に接した床面から出土した。

台石(1)としたものは堅穴内北東隅付近に置かれていたもので、上下に平坦面をもつ27×17×8.7cmの玄武岩である。自然石であるが本跡の性格を考えた場合、これは攻玉に必要な台石とみてよからう。

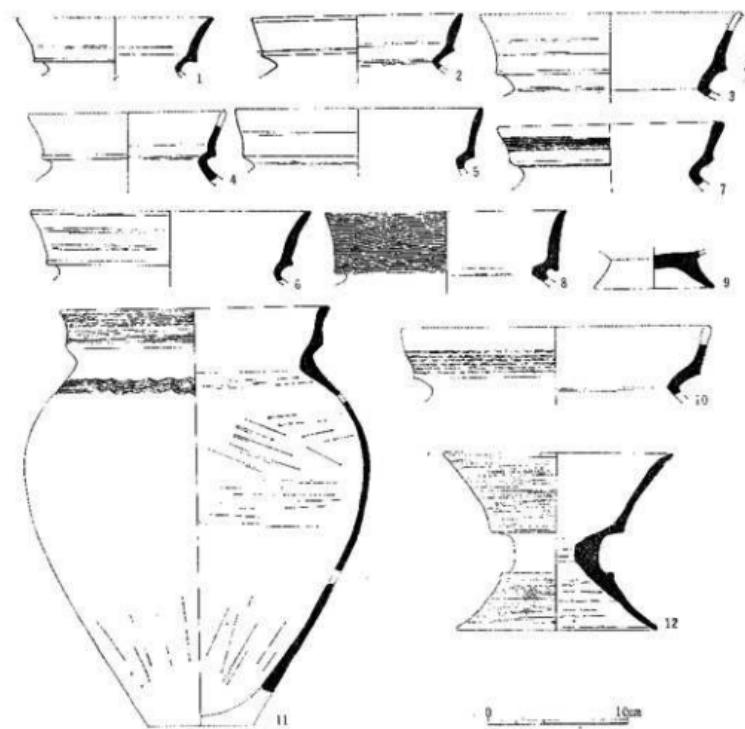
なお、工作用ピット北東側で挙大ないし人頭大的の自然石が散見された。これらも、攻玉に際して何らかの形で必要とされたものとして注意しておきたい。

### 3. その他の遺構と遺物

以上のほか、丘腹部において溝状遺構1を検出し、丘陵の斜面で占式土器の集積3ヶ所、落ち込み1ヶ所を確認した。

#### (1) 溝状遺構

丘腹部に位置し、この溝は北西から南東方向に直線状に走り、1・2・3号住居跡、玉作工房跡と重複している。土層の堆積状態からすると、この溝は2・3号住居跡、玉作工房



第18図 蔵状遺構、N15・E131km上上層尖削圖

跡を掘り込み、これらとの前後関係は明瞭であったが、1号住居跡との関係は不明であった。遺構の検出面は現地表下60cmで上縁約1~1.5m、基底部約40~60cm、深さ30cmあまりを計る。確認し得た長さは14mでその西北端は1号住居跡の西壁付近で確かめたが、南東端については後世の搅乱その他でこれを把握することができなかった。溝内には拳大ないし人頭大の野石が散在していた。これらは溝内堆積土中最も下層の黒色土上面から上層の暗黒褐色土層にかけてみられ、基底部から20cmあまり浮いていた。このほか若干の占式七輪器片も出土している。ただし、モ作工房跡と重複している部分に含まれていた土器（第18図7~10）はいずれに伴うものか判断し難い状態であった。明らかにこの溝に伴うとみられる土器は1~6の壺・甌類口縁部である。これらはいずれも溝内の薄いやや外反して立ち上る複合口縁をもつもので、口縁部内外面にヨコナデ、内面頸部以下に頭著なヘラ削りがな

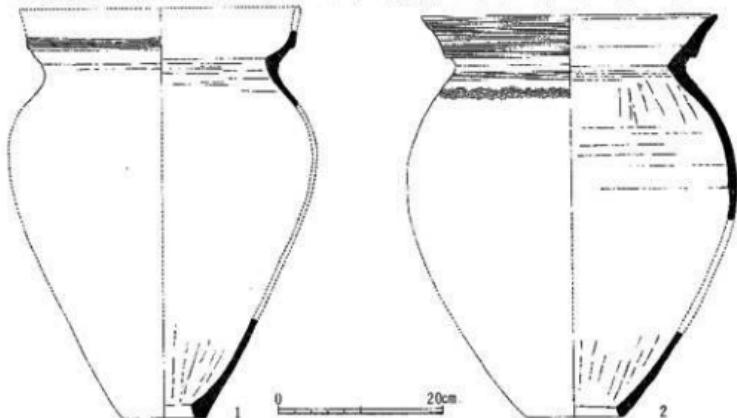
されている。こうした特徴からこれらは縦尾II式の範疇に属するものとみてよかろう。

なお、この造構が木造跡内においてどのような性格と機能を有するのか現段階では明らかでない。

#### (e) その他の

丘陵の斜面で検出された古式土師器の集積箇所はN15・16-E16・17区、N15・E14区、N15・E13区の3地点である。このうち、N15・16-E16・17区、N15・E14区のものは極めてよく似た出土状態を示し、いずれも大形の壺が押しつぶされたもののように観察された。N15・16-E16・17区の壺(第19図1)は器高50cm、口径35cmに復し得るもので、口縁部には柳状工具による沈線がめぐり、内面は頸部以下にヘラ削り、口縁部にヘラ磨きがみられる。N15・E14区出土のもの(第19図2)は全形を窺えないが器高48cm、口径36cmと推定される壺である。これには口縁部と肩部に柳状工具による施文がみられ、それは5~6本を1単位としている。内面は頸部以下に頗るなヘラ削りがみられる。注意すべきはいずれも底部が穿孔されていることである。これは埋葬遺跡に関係して出土するこの種壺形土器と共通するものがある。なお、著しく風化しているが底部の穿孔は焼成前のものと観察される。

これらに対してN15・E13区では相接して穿たれた上縁径60cm、底径23cm、深さ24cmあまりのピットが2個あり、これに伴って壺1、鼓形器台1が出土した。その在り方は、先の2地区とは異なる様相を示しており、詳細は明らかでないが、たとえば祭祀に関連するものであろうか。ここから検出された壺(第18図11)は複合口縁を有するもので、口縁部に平行沈線文、肩部に波状文がみられ、これらの施文具は5本を1単位とする同一工具によ



第19図 N15・16-E16・17区、N15・E14区出土上縁尖削圖

ってなされている。調整は脚部外面へラ磨き、内面頸部以下はヘラ削りが顕著。鼓形器台(第18図12)は器面の風化が著しいが、器受部及び脚台外面に緻密な櫛状平行線文がみられ、内面は器受部にヘラ磨き、脚台部にヘラ削りが観察される。

これら3地区出土土器は、個々に若干の相異があるが、器形・文様・製作技法その他から概ね縄尾式土器の範疇に属するものとみてよかろう。

## 5 小 結

以上、平野遺跡における今年度調査の結果を記してきた。玉作工房跡、埴輪窯跡の検出、多量の古式土師器の出土などいくつかの新知見と新資料が得られたが、このうち特に注目すべき2、3の事柄について若干の私見を述べて結びにかえたい。

まず、年代決定を行う上で基準となる各遺構出土上器群の組成・器形・文様・製作技法等をみると、型式学上少なくとも1号住居跡・溝状遺構出土土器と玉作工房跡出土土器との間には相違のあることが知られる。すなわち、両者の相違点を要約すれば次の通りである。まず1号住居跡・溝状遺構出土土器のうち、壺・壺類は

①外反する複合口縁を有し、やや肩が張り倒卵形をなす。底部は小形のものはほとんど丸底で、やや大形のものについては不安定な平底となる。

③文様はほとんど施されない。

④調査は口縁部内外面共にヨコナデ、内面頸部以下はヘラ削りが顕著で器内が薄い。

鼓形器台は

①全体に器高が低く、器受部と脚台部をつなぐ筒部が太く短い。

③施文はほとんどみられない。

③器受部の内面はヘラ磨き、脚台部の内面は顕著なヘラ削り。

これらは各器種を通じて胎土中に小砂粒を含む。

これに対しても、玉作工房跡出土の壺・壺類は

①2種の複合口縁があり、その1類は頸部がくの字状に屈折し、口縁部はやや外傾して立ち上る。2類は頸部がゆるやかに屈曲し、大きく外反する口縁部をもつ。共に肩が張り、胴から底部に向けてやや直線的に縮約する。底は内面に丸味をもつが、比較的しっかりした平底か、不安定な平底に終る。

②1類は口縁部外面向にやや太い平行沈線文をめぐらし、肩部に絞杉状の刺突文を施すものもある。2類には全く文様はみられない。

③1・2類とも口縁部内面はヘラ磨き、胸部は外面ヘラ磨きないし刷毛目で調整される。

頸部以下の内面はヘラ削りがなされるが、器肉は全体に厚い。

#### 鼓形器台は

①1号住居跡出土の器台とほぼ同様な形状をもつが、筒部が細く縮約し、全体に器高が高い。

②器受部・脚台部には外面に平行沈線文が施される。

③器面の調整は1号住居跡出土のものと同様。

各器種とも胎土中にやや大粒の砂粒を混じている。

一方、これらについては、遺構の切合関係から玉作工房跡、2・3号住居跡（古）→海状遺構（新）という関係を確認している。また、1号住居跡出七七器群は溝状遺構出土のものと様相を同じくするものである。したがって、先に記した土器様相の相違には、両者の間に、玉作工房跡（古）→1号住居跡（新）という新旧関係のあることが知られる。

ところで、山陰では、これまで弥生式土器から古式七七器にかけての変遷について、九重式上器→鍵尾I式（的場式）土器→鍵尾II式土器という関係が示されている。これに従えば本遺跡出土の古式土器は全て汎觀尾式の範疇に属するもので、玉作工房跡山上上器群は鍵尾I式、1号住居跡・溝状遺構出七七器群は鍵尾II式に比定される。なお、丘陵斜面で発見された盛・器台類は鍵尾I式に属し、2・3号住居跡出土のものも概ねこれに近い特徴をもつものである。ただし、これまで行なわれている編年は埋葬遺跡という特殊な場所から出土したものを基準に組み立てられたもので、これを直ちに一般の生活跡出土のものに適用するには無理な点がないでもない。例えば、弥生時代から古墳時代にかけての大集落である鳥取県米子市福富・青木町遺跡では多数の鍵尾II式の住居跡が検出されているものの鍵尾I式の住居跡はほとんど確認されていない。また、山陰地方の僅少な例でもこれまで鍵尾I式の住居跡は知られていなかった。こうしたことから、従来筆者等は密かに鍵尾I式七七器は埋葬遺跡において顕著にみられるもので、生活跡では土器の型式として現われないものと考えていた。ただ、ごく最近調査された安来市叶谷遺跡では一般的の竪穴式住居跡から明らかに鍵尾I式土器の特徴をもつ古式土器が出土しているとのことである。平所遺跡で検出した玉作工房跡は必ずしも一般的の住居跡とは言えないが、ここでも鍵尾I式土器に属する一群の土器が出土している。これらからすると、鍵尾I式土器は同じく山陰といっても山陰部を中心とする地域性の強いものとも思われるが、いずれにしても今回出土した一群の土器は、山陰の古式七七器を再検討していく上で好資料を提供したものといえよう。

次に特筆すべきは玉作工房跡の検出されたことである。本工房跡は中央に玉作工房特有の工作用ピットを備えるもので、玉材として多量の水晶と碧玉、赤瑪瑙を出土し、うち87%が水晶質材で占められていた。末成品の形状は算盤玉状のものと丸玉状の2種があり、これら玉類にはその製作工程に若干の差異がみられるが、概ね荒削—調整—研磨—穿孔一仕上げの過程を経て完成している。工具として整状、ケンガネ状、錐状品等100点以上ものぼる多量の鉄製品が出土しているほか、勢車と考えられる土製品もある。また、砾石には玉磨筋砾石、道具砾石等があり、玉作工房跡としての在り方を如実に示すものであった。これら攻玉に直接関係する遺物のほか、工作用ピット内その他から古式土師器が出土しており、それらは先に記したように鶴尾I式の特徴を行するものであった。

今のところこの時期の玉作工房跡で水晶質材を主たる玉材としているものは皆見に触れる限りでは寡聞にして聞かない。また、弥生時代から古墳時代前期にかけての埋葬遺跡その他においても水晶製玉類の出土は全國的にほとんど知られていない。

ところで、出雲国には八束郡玉湯町史跡出雲玉作跡をはじめ松江市忌部町忌部玉作遺跡、<sup>(註15)</sup>同大草町史跡川雲国<sup>(註16)</sup>内玉作遺跡、大原郡大東町大東高校校庭遺跡、安来市佐久保町佐久保遺跡等多数の玉作関係遺跡が知られている。<sup>(註17)</sup>一般に出雲國玉作といえればこれら出雲國所在の関係遺跡全てを含むが、これを狹義に解する場合、すなわち『占語拾遺』に「梯明玉命山雲國忌部玉作祖也。梯明玉命之孫、造御析玉、其裔今在出雲國、毎年与御物、賛進其玉。」<sup>(註18)</sup>とあり、また『延喜式』にもその記載のみえる出雲國玉作は碧玉、瑪瑙、水晶等を産出する花仙山周辺の史跡出雲玉作跡、忌部玉作遺跡等をさす。

なかでも古來著名な史跡出雲玉作跡は最も盛行を極めた玉作で、昭和44年から3次にわたる発掘調査によってこれまで最大な各種玉作関係遺物と多数の工房跡が発見されている。それによると、玉作の開始は4世紀末で、以後奈良、平安時代に至るまで盛んに攻玉を実施していたことが知られる。出雲國玉作といえれば常に古代社会における玉作部の性格や、生産構造の特質と関連して論議されることが多い。いわゆる玉作部として組織された時期は明確に把握されていないが、一般に説かれているように5世紀のある時点に求めて矛盾はないものと考えられる。出雲國玉作において攻玉開始時期の工房とみられる史跡出雲玉作跡の71C II号址は鶴尾II式土器を伴うもので、碧玉質材を主な玉材とし、水晶製玉類の製作はいまだこの時点で行なわれていなかった。なお、この工房跡における工作用ピットは平所遺跡のそれと同様床面のほぼ中央に穿たれていることが注意される。史跡出雲玉作跡で水晶製玉類の生産が開始されるのは71B 1号址で示されるように6世紀代で、工作用ピットもこの時期になると壁際に位置し、小滝を伴うなど完備されたものである。

出雲國工作の開始、水晶製玉類の出現など史跡出雲玉作跡で得られた知見とも関連して今回平所遺跡で発見された工房跡はさまざまな問題を提起している。ただし、今のところ平所遺跡では玉作工房跡を1棟しか検出していない。丘陵の全城にわたって調査を実施していないのでなおいくつかの玉作工房跡の存在する可能性もあるが、今のところその在り方は史跡出雲玉作跡のように後に專業集団として組織化されるような素地は認め難い。時期は降るが6世紀代に當まれたと考えられる安来市佐久保遺跡などと同様、単位集団内における專業的生産形態を示すものであろうか。

- 註1 山本清・近藤正・前島己基『樹文・弥生遺跡』『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 2 松江市教育委員会『出雲国守跡発掘調査概報』（昭和46年）及び町田章「古代官衙跡『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 3 前島己基『古代守院跡』『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 4 山本清氏調査（昭和45年）
- 5 山本清『米発掘古墳』『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 6 註2と同じ
- 7 穂部昭『御崎山古墳』『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 8 註2と同じ
- 9 山本清『古墳』『鳥取県文化財調査報告』第5集（昭和43年）
- 10 国崎雄二郎『「王免模穴群』『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』鳥取県教育委員会（昭和50年）
- 11 山本清『山陰地方』『新版考古学講座』5（昭和45年）
- 12 山陰考古学研究所『福市遺跡の研究』（昭和44年）
- 13 米子市教育委員会『米子市青木遺跡市道予定地発掘調査概報』（昭和49年）
- 14 昭和50年11月に三宅博士が調査したものである。
- 15 長湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡』（昭和47年）
- 16 寺村光晴『古代玉作の研究』（昭和41年）
- 17 近藤正『出土品』『鳥取県文化財調査報告』第5集（昭和43年）
- 18 蓬間法障『古代社会の発展』『大東町史』（昭和47年）
- 19 内田才『原史・古代』『安来市誌』（昭和45年）

図版 I 平所遺跡 (1)



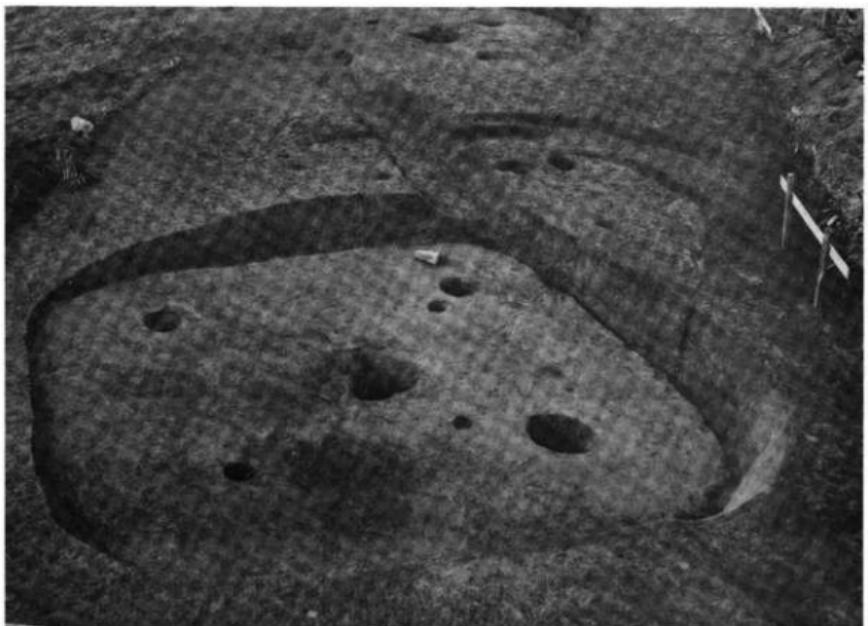
1. 遺跡遠景（南西から）



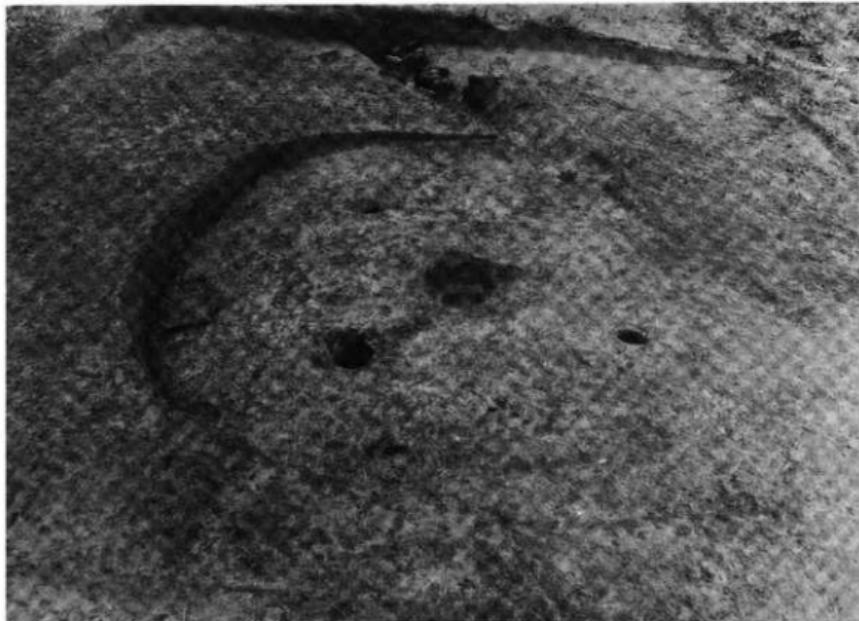
2. 遺跡近景（西から）



1. 丘腹部の遺構群（南から）



2. 丘腹部の遺構（手前から4号住溝、3・2号住、1号住居跡）



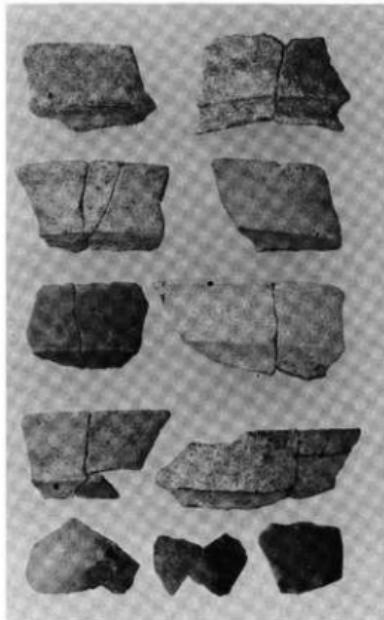
1. 1号住居跡(北から)



2. 木製品等出土状態



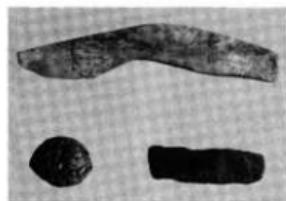
3. 瓢出土状態



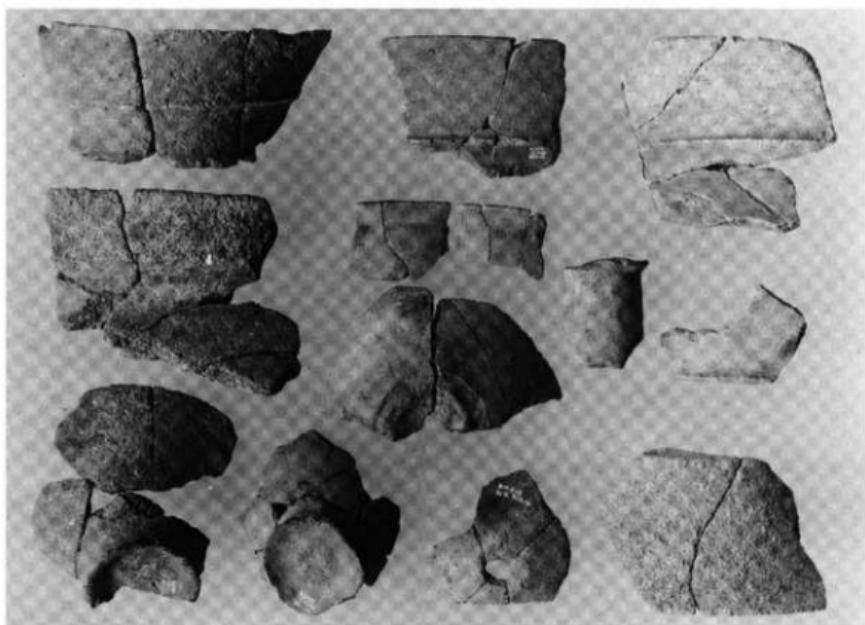
1. 1号住居跡出土土師器



3. 1号住居跡  
出土瓶



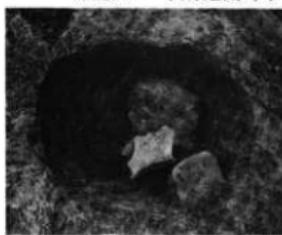
4. 1号住居跡  
出土遺物



2. 1号住居跡出土土師器



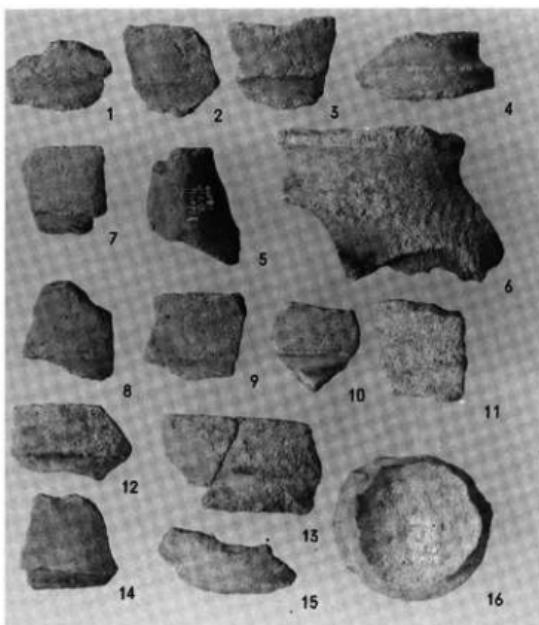
1. 2・3号住居跡と溝状造構



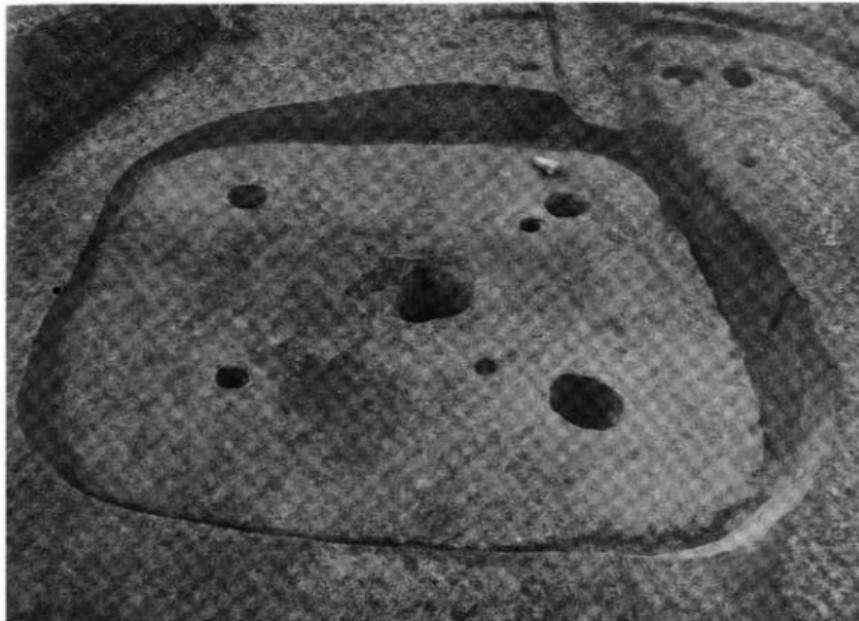
2. 3号住居跡ピット内土器  
出土状態



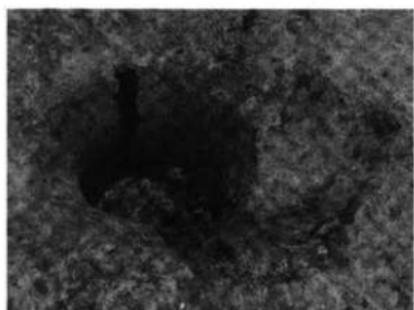
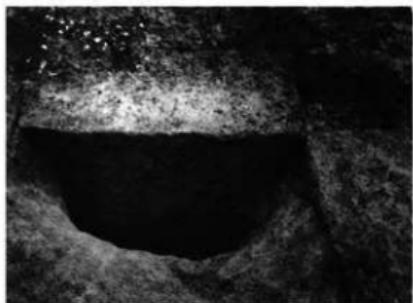
3. 溝状造構内土層堆積状況



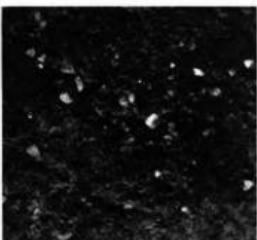
4. 2号(1~5)・3号(6)  
住居跡と溝状造構(7~16)  
内出土土器



1. 玉作工房跡（南から）



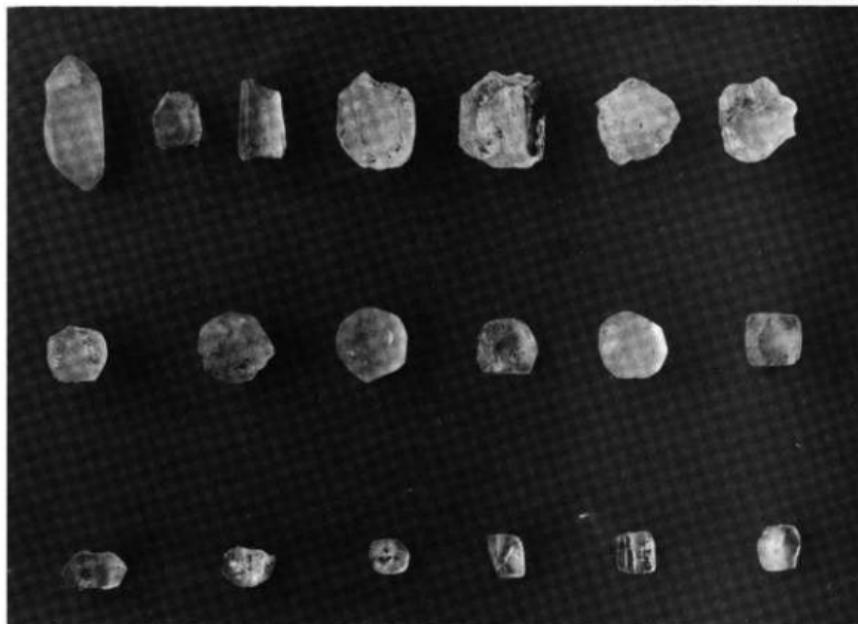
2. 工作用ビット（上 土層堆積状況 下 ビット内部）



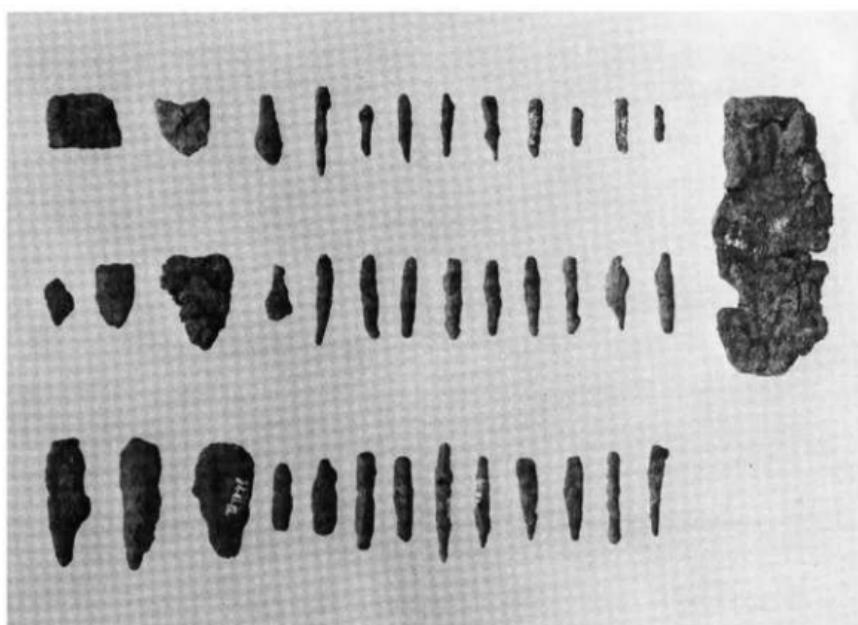
3. 玉類未成品  
出土状態



4. 第2ビット内土器出土状態



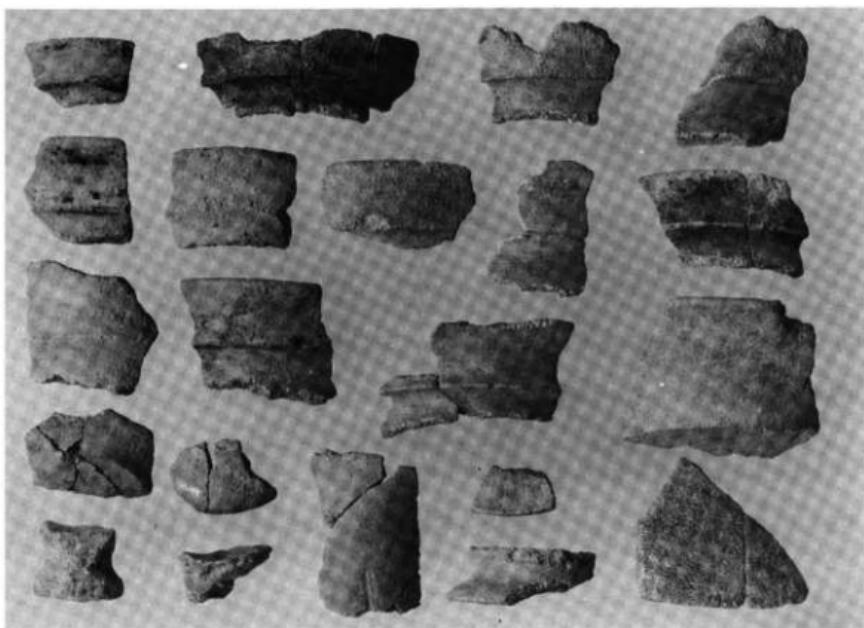
1. 玉作工房跡出土玉類未成品と剥片



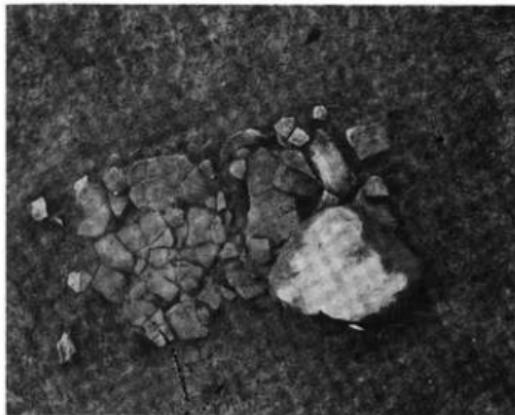
2. 玉作工房跡出土鉄製工具



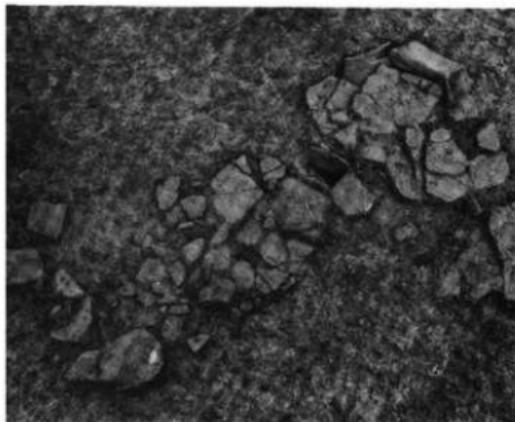
1. 玉作工房跡出土砥石と台石



2. 玉作工房跡出土土師器



1. N15-E16-E17区検出土器と  
その出土状態



2. N15-E14区検出土器とその出  
土状態



3. N15-E13区  
検出土器と  
その出土状  
態



# Ⅱ 才ノ峠古墳群

—松江市竹矢町字才ノ峠所在—

1. 調査の経過.....	29
2. 位置と環境.....	30
3. 古墳群の概要.....	31
(1) 1号墳.....	31
(2) 1号墳周囲の遺構.....	36
(3) 2号墳.....	41
(4) その他の遺物.....	44
4. 小結.....	44

## 挿 図 目 次

第1図 古墳群の位置	30
第2図 古墳群地形測量図	31
第3図 1号墳墳丘実測図	32
第4図 第1主体実測図	33
第5図 第2主体実測図	33
第6図 鉄製品尖頭(1)	34
第7図 鉄製品尖頭(2)	35
第8図 須恵器火葬圖	36
第9図 1号住居跡実測図	37
第10図 1号住居跡出土遺物実測図	38
第11図 2号住居跡実測図	39
第12図 2号住居跡出土土器実測図	39
第13図 1号土壤実測図	40
第14図 2号土壤実測図	40
第15図 1・2号上坡、溝状遺構出土土器実測図	40
第16図 2号墳墳丘実測図	41
第17図 2号墳出土遺物実測図	42
第18図 奈良時代土器実測図	48

## 図 版 目 次

図版I-1 古墳群遠景	図版VI-2 第1主体出土鉄製工具類
図版I-2 1号墳発掘前の墳丘	図版VI-3 第1主体出土鉄錐
図版II-1 1号墳第1主体	図版VI-4 第2主体出土須恵器柄
図版II-2 第1主体鉄製品出土状態	図版VII-1 1号住居跡出土遺物
図版III-1 1号墳第2主体	図版VII-2 2号住居跡出土遺物
図版III-2 第2主体検出状況(1)	図版VIII-1 2号墳発掘前の墳丘
図版III-3 第2主体検出状況(2)	図版VIII-2 2号墳発掘後の墳丘
図版IV-1 1号住居跡	図版IX-1 2号墳墳丘斜面須恵器出土状態
図版IV-2 2号住居跡	図版IX-2 2号墳出土須恵器
図版V-1 1号土壤	図版X-1 2号墳出土埴輪円筒
図版V-2 2号土壤(上)溝状遺構(F)	図版X-2 墳丘上の奈良時代遺物出土状態
図版V-3 発掘後の1号墳墳丘と周囲の遺構	図版XI-1 奈良時代遺物出土状態細部
図版VI-1 1号墳第1主体出土鉄劍・槍・直刀	図版XI-2 奈良時代の遺物

## 1 調査の経過

今年度調査の対象となった3遺跡のうち、最初に着手したのが才ノ峰古墳群で、調査期間は昭和50年7月21日～10月2日までの53日間を要した。発掘担当者は勝部昭で、実際の調査にあたっては主として松本岩雄がこれを行ない、平野芳英（熊本大学大学院生）、堀井伸二、浪花秀明（以上愛知学院大学学生）、花谷浩（京都大学学生）、細木啓義（岡山大学学生）の協力を得た。

調査はまず1号墳から開始した。立木伐採のあと縮尺200分の1で、25cmの等高線を入れて墳丘測量図を作成。これに引き続き調査対象地区全域に $2 \times 2 m$ のグリッドを設定し、墳頂平坦部から発掘を始める。現地表下約30cm掘り下げた時点で、墳丘のはば中央部に炭化物を含む黒褐色土の落ち込みを検出した。これは全長2.5m、幅50cm、深さ15cmの素掘り木棺直葬土壙で、内部から鉄製武器類、鉄製工具類等多数の副葬品が出土し、本墳の中心主体であることが判明した。土体部の調査と併行して外部施設、墳裾等を確認するために発掘区を次第に墳丘斜面ないし墳頂へと拡張した。その結果、築成当時の墳裾線が確認され、本墳が一辺約15mの方墳であることが明らかになった。さらに墳丘の全域にわたって精査を行ったが、葺石、墳帽等の外部施設は認められなかった。なお、これらの調査を進めて行く過程で、墳丘北側斜面において須恵器大形蓋を埋蔵した土壙を検出した。これはその在り方等から埋葬に関係するものと考えられた。

一方、墳丘の周囲には東と西側にわずかながら平坦部がみられ、これの調査を行なったところ、両墳裾線に一部重って竪穴式住居跡状の遺構2、溝状遺構1が検出され、ほかに小形長方形上壙2が認められた。これらはいずれも奈良時代に營まれたもので、古墳とは直接関係しないものと判断された。

1号墳及びその周囲の調査と併行して8月20日から2号墳の調査を開始した。墳丘はすでに土砂崩れ等により大きく失なわれていたが、立木伐採後、1号墳と同一縮尺で地形測量を行ったところ、本墳は前方後方形を示し、くびれ部に接続する後方部の一部と前方部の残存していることが明らかになった。土体部は認められなかつたが、残丘部の調査により墳丘斜面から埴輪円筒片、くびれ部から須恵器片が出土した。このほか、くびれ部の地表面下において奈良時代須恵器が集中的に出土した。

遺跡としてはさしたる規模のものではなかつたが、墳丘のみの調査にとどまらずその周囲にも発掘の手を延ばしたため予想以上の日数を要したが、10月2日に一応現場での作業

を終了した。

調査によって得られた遺物は、発掘終了後八雲立つ風土記丘資料館に搬入し、整理を行った。遺物整理には松本、花谷があたった。

なお、島根大学名誉教授山本清氏には遺物整理にあたっても終始暖かい御指導をいただいた。

## 2 位置と環境



第1図 古墳群の位置 (○印)

この古墳群は松江市竹矢町字才ノ峰1552-1、1554-1、1554番地に所在し、意宇川下流平野の北東丘陵地帯の一角に當まれている。意宇川下流平野はその北側を茶臼山（標高171m）及びそこから派生する多くの小支脈によって割されているが、本古墳群はその北東麓にあたる一支部、西から東にのびる標高約30mの丘陵上に位置する。

平野をとり巻く周囲の丘陵には夥しい数の古墳が群在している。本古墳群の位置する平野北東丘陵一带もその古墳密集地帯の一つで、先の平所遺跡「位置と環境」の項では挙げなかったが、付近には最近埴輪鳥と多数の埴輪円筒が発見された井ノ奥4号墳や手間古墳をはじめ、舟形石棺を内蔵する竹矢岩舟古墳<sup>(註3)</sup>、荒神石舟古墳<sup>(註4)</sup>、中竹矢古墳<sup>(註5)</sup>、社日古墳<sup>(註6)</sup>、的場古墳群<sup>(註7)</sup>、官内岩船古墳、代官家横穴群<sup>(註8)</sup>、的場横穴群など大小多数の古墳と古墳群が分布している。このうち手間古墳、井ノ奥4号墳はいずれも5世紀代の築造と考えられる大形前方後圓墳で、この平野における古墳分布の在り方が方墳、前方後方墳を主体とするものであるだけに異質な様相をもつものとして注目される。

律令制になると、平野中央部の南側に出雲國守が設置され、本古墳群に近い平野北側には出雲國分僧・尼寺が造営される。才ノ峰古墳群のある丘陵の東側には『出雲國風土記』に「國の守より海辺に通う道」とみえる朝駒の渡へ通ずる道が旧状をとどめている。

### 3 古 墳 群 の 概 要

本古墳群は方墳1、前方後方墳1で構成されており、ともに標高約30mの同一丘陵上にある。1号墳は東方向に突出する丘陵の尾根上に位置している。2号墳はその北西約50mのところにあり、1号墳より2mばかり高所に営まれている。

1号墳は一辺約15mの方墳で、埋葬構造としては中央の中心主体のはか、墳丘北側斜面に須恵器の大形壺を伴う土壙が設けられていた。2号墳は墳丘の大半を失っていたが、前方後方墳と考えられ、もとは全長20mあまりあったものと推定される。主体部は消失していたが、墳丘斜面ないしきびれ部から埴輪円筒片と須恵器片が出土した。

なお、丘陵上にはこのほか1号墳墳廻に竪穴式住居跡状遺構2、土壙2、溝状遺構1が存在している。また、2号墳くびれ部では奈良時代須恵器の集積を認めている。

以下個々についてその調査結果を記すことにしよう。

#### 1. 1号 墳

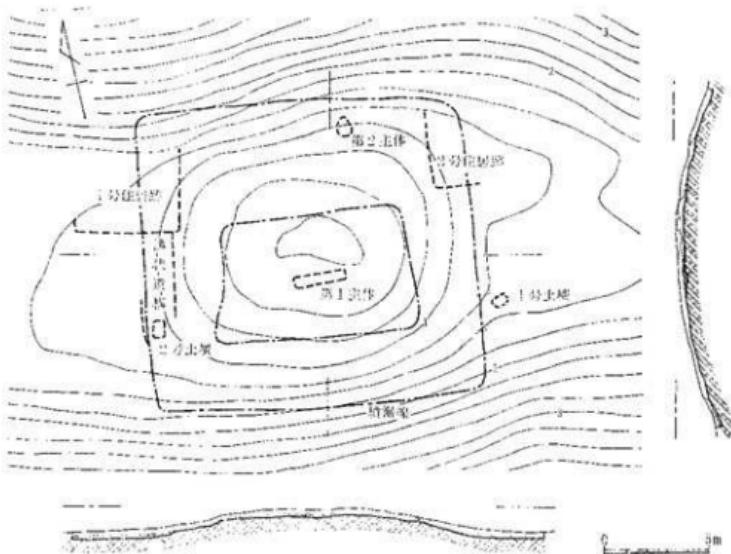
##### (1) 墳丘の調査

本古墳は西から東に向ってのびる標高30mの丘陵にわずかな盛り上がりをみせる程度で、調査前の立木が生い茂っている段階では見逃してしまいそうな小規模なものであった。測量調査では尾根続きの東、西側で周溝の存在が予想され、墳丘はほぼ築成当時の状況を保っているものと観察された。

築成時の墳丘は南北長14.5m、東西長15.7mの東西にやや長い方形プランを呈し、上面には5.7×8.6mの平坦面がみられる。高さは東側の墳裾線から1.06m、西側の墳裾線から0.9m、南北側の墳裾線から1.3mあり、場所によってそれぞれ高さが若干異なっている。



第2図 古 墳 群 地 形 測 量 図



第3図 1号墳 墳丘実測図

これは丘陵の北側、南側が急斜面になっているという自然地形の制約から、墳丘の十分な整形が困難であったためと考えられる。

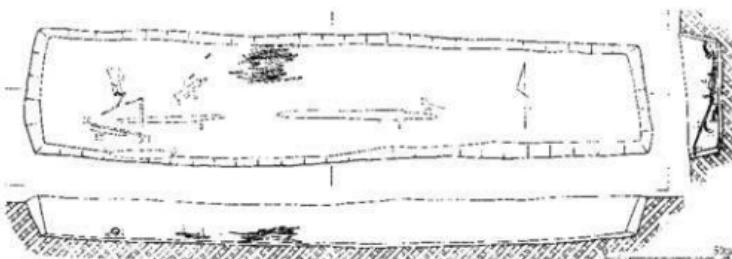
墳丘の築成にあたっては、まず四辺の地山に切削加工を加えて方形台状の土壇を形成している。築成当時、地山の上面に堆積していたとみられる旧表土が確認されなかったことから、土壇の上面は地ならしきれたのちに表面が消められたものと推定される。こうして形成された七段土上に地山の加工によって得られた暗褐色～暗黄褐色土が盛り上げられる。しかし、現在残っている盛土の量は少なく、厚いところで30cmあまりしか認められなかつた。後記する中心主体の深さ等からすると、築成当時は今少しの盛土がなされていたのではないかろうか。

なお、当初予想していた周溝はみとめられず、比較的簡素な構築法によるものであることが知られた。

#### (a) 内部構造

内部構造としては、本墳の中心主体の木棺直葬土塙1が墳央部にあり、ほかに墳丘北側斜面において須恵器大形蔵を納めた土塙1がみられる。

**第1主室** 墳丘のほぼ中央に設けられた第1主室は、長方形プランを呈する素掘りの土

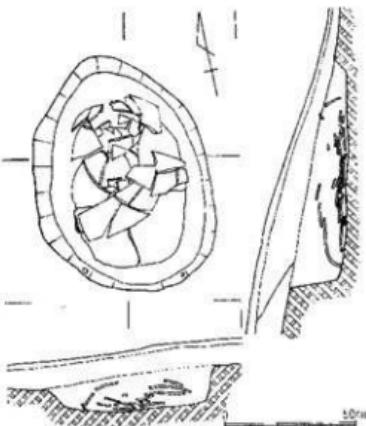


第4図 第1主体実測図

墳で、主軸を東西方向に向ける。上墳は暗褐色地山面から検出され、その規模は上縁の長さ2.5m、幅東側で44cm、西側で50cm、墳底の長さ2.4m、幅36~42.5cmで、深さは墓壙検出面から15cm、現地表面から45cmの浅い位置にある。墳壁は垂直に掘り込まれ、墳底はわずかに東側が高くつくられていた。検出面の平面形は西側がやや広かったが、墳底の高さからするとおそらく東側に頭部が置かれていたものであろう。墳底及び墳内には木質炭化物が認められ、これらから箱形の木棺を安置したものと推定された。ただし墳底には、組み合せ木棺にしばしばみられるような墳壁沿いの溝などは認められなかった。

墳内には副葬品として鉄製の劍1、直刀1、槍1、鎌1束、斧1、鉤3、鑿2、刀子1が残されていた。劍、直刀は墓壙のほぼ中央部にあり、主軸に沿って切先を西に向かって墳底直上に置かれていた。また鎌は墳底に接し、矢先を東に向けて北壁沿いからままとまって出土し、その状況は廻葬時に括してこれを納めたもののようにあった。槍は南壁沿いの西側から出土し、墳底から10cmあまり浮いた状態にあり、切先は西に向かっていた。鉄製工具の斧、鉤、鑿、刀子もまた墳底より遺棄した状態で出土し、これらの工具は刃先が不定方向を示していた。

これらの出土状態から、劍、直刀、鎌は棺内、槍は棺外側、斧・鉤・鑿・刀子の工具類は棺上に置かれていたものと推



第5図 第2主体実測図

定された。副葬品の取扱いについて当時その種類等によって若干の相違があったのではないかろうか。

**第2主体** 須恵器大形壺を伴なう土壇で墳丘の北側斜面に位置している。土壇は素掘りで梢円形プランを呈し、主軸をほぼ南北方向にとる。規模は上縁での長径92cm、短径67cm、壇底の長径83cm、短径58cmあり、遺構を検出した地山面から深さ20~6cmを計る。壇壁は最も遺存状態のよい南側で約80°の傾斜をもって掘り込まれ、壇底はほぼ水平につくられている。

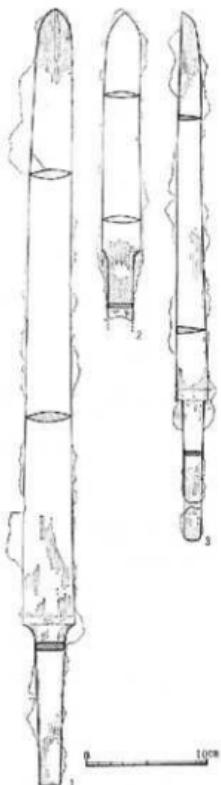
土壇内には須恵器の大形壺1個体分が破片の状態で認められた。その出土状態は壇底に接して掌大の胴部片を散きつめた状況を示し、上部には厚さ13cmの黒褐色土をはさんで大形破片が置かれていた。これらから第2主体は次のような理葬方法をとったものと考えられた。すなわら、まず大形壺を破碎し、壇底に曲面の少ない小破片を散きつめ、その上に遺体を安置して、これを大形の破片で被覆するという理葬方法が推定された。

#### (a) 遺物

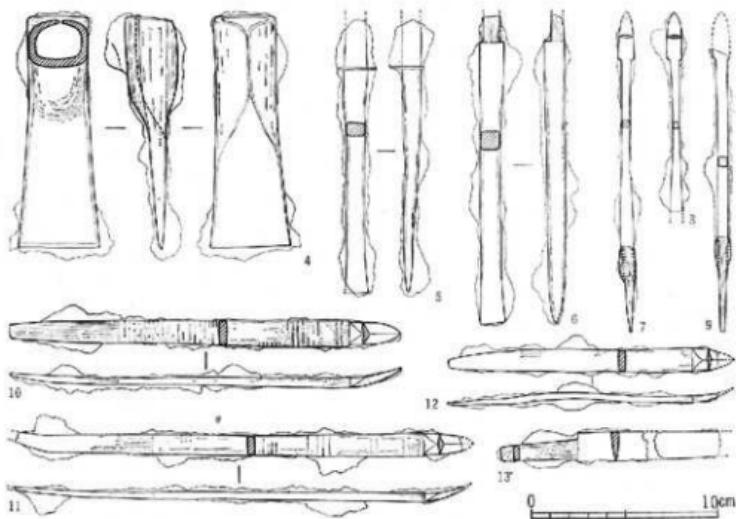
第1主体に副葬されていた遺物は鉄製武器の剣1、直刀1、槍1、鎌1束と、工具の斧1、鉤3、鑿2、刀子1で、第2主体からは須恵器壺1が出土している。

**鉄製品** 第1主体から出土した鉄製品のうち武器としての鉄剣(第6図1)は全長64.4cm、身幅4.2cmで、茎は長さ13.4cm、刃部で幅2.5cmを有する。剣身厚0.8cmで、鍔は不明瞭である。剣身部に木質が付着していることから木鞘を具して埋納されていたことが知られる。茎には柄木の木質が遺存していたが、目釘穴はみられなかった。柄木と柄木の接する部分には幅約0.7cmの責金具とみられる装具をはめていた痕跡が認められたが、その他の外装については明らかでない。

鉄槍(2)は茎の先端を欠き、残存長25.5cmある。身の長さは22.7cm、幅3.2cmで、断面はレンズ状で厚さ0.6cmあり、鍔を欠く。茎から槍身にかけて木質が接着しており、茎は木柄で呑口式に着装されていたものようである。ただし、



第6図 鉄製品実測図(1)



第7図 鉄製品実測図(2)

柄頭がどのような方法で固定されていたのか明らかでない。なお、槍身には何らの付着物も認められなかった。

直刀(3)は茎部に一部欠損があるが、全長推定43.8cmを計る。刀身は切先部がわずかに内彎し、長さ32.1cm、最大幅2.5cm、棟幅0.5cm、茎は推定11.7cm、幅1.8cmで、身に比べや長く、目釘穴はみられない。刀身と茎には木質が付着し、木鞘、木柄を着装して副葬されていたと考えられるが、間に接した刀身部には木質がみられない。おそらく、木鞘をわずかに抜いた状態で埋納したものであろうか。

鉄鎌(第7図7~9)は北壁沿いの棺内に置かれていたもので、数10本が一束をなし出土したものである。いずれも両刃の長頭式に属し、長さは先端から茎端まで17cm内外である。茎には矢柄として竹材が着装され、外面には桜皮と考えられる樹皮が巻かれている。

鉄製工具のうち斧は、袋部を有する無肩式に属する。刃部は袋部よりやや広くつくられ、斧頭長12.4cm、袋部幅3.3cm、刃部幅4.2cmで、袋部内部に木質の痕跡がみられることからすれば、木柄を着装したまま埋納されたものであろう。

鑿は2本あり、いずれも通有の平鑿に属するもので、形態上2種に分かれる。その1つ(5)は残存長14.5cm、身の長さ11.8cmあり、断面形は長方形で刃部幅1.2cmを計る。柄の材質は明らかでないがその着装にあたっては、関部に柄を固定するためのものとみられる薄

い鍔状の金具を伴っている。これに對して6は残存長16.4cm、うち身長14.9cmで身がやや長くつくられ、その断面は方柱状を呈する。茎には外表に木質が付着し、木柄を挿入したものと考えられるが、5のような固定金具はみられない。同じく平鑄とはいえ、柄の着装法等の違いは使用目的の相違を示すものであろう。

鉤(10、11、12)は3本あり、いずれも同様な形態を示すもので鉤は断面山形をなし、明瞭な筋を有する。

うち、10・11の2本は鉄柄の長い形式に属するもので、ともに鉤身は鋒先より約2.5cm突出している。鉄柄には木質が付着し、その表面には植物製織維が巻かれていた。10は全長20.9cm、11は残存長23.9cmで鉄柄端にはともに若干の反りがある。12は鉄柄が短かく、鋒先を欠くが残存長14.5cmあり、柄にはやはり木質が付着している。

刀子(13)は切先部を欠くもので残存長11.2cm、うち茎の長さ4cmを計る。身幅1.5cm、棹幅0.4cmで茎には木質が接着していた。

須恵器 墳丘北側斜面の第2主体に埋置されていた大形壺で、破片の状態で出土したが、ほぼ1個体に復し得るものである。

口径21.2cm、器高54cm、腹部最大径46.4cmあり、口縁端に鈍い張らみをめぐらす短い口頭部をもつ。器面の調整にあたっては外面に平行叩き目があってその上にカキ目が走り、内面は同心円のタタキがなされている。なお、器面には口縁部から肩部にかけての外面と口縁部の内面に薄い自然釉が発現している。

その他、墳丘の西南隅墳籠で勾玉1個を得ている。図示しなかったが濃青色を呈すコの字形の勾玉で、長さ3.4cmある。石質は不明。

## 2. 1号墳周囲の遺構と遺物

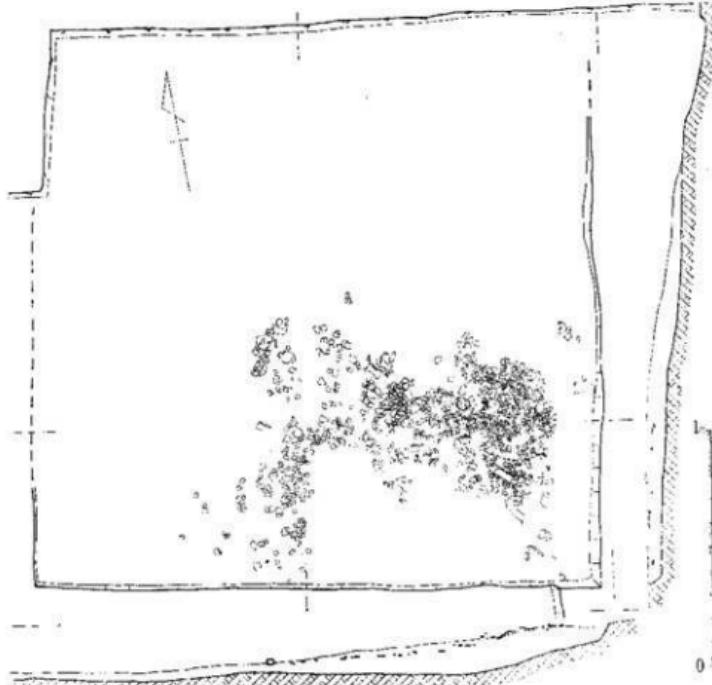
1号墳の周囲には、竪穴式住居跡状の遺構2、土壇2、溝状遺構1が認められた。このうち竪穴式住居跡遺構としたものについては、性格など不明な点が多いが、ここでは一応竪穴式住居跡として取り扱った。



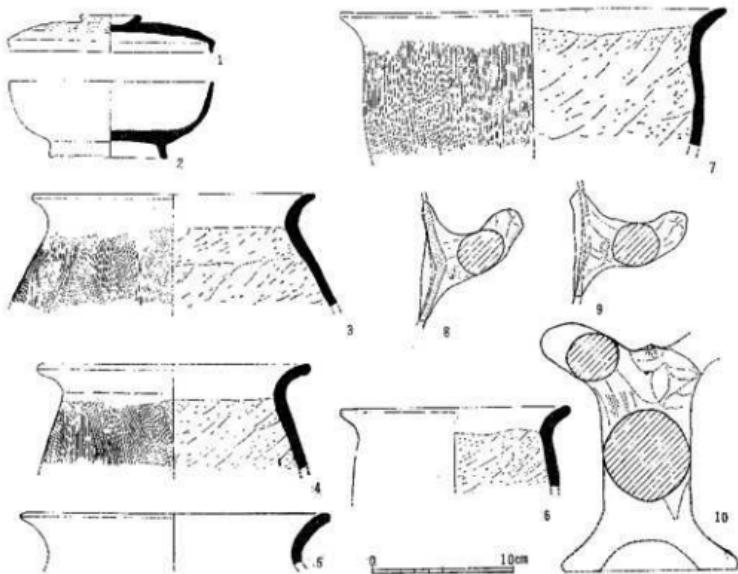
第8図 須恵器実測図  
0 20cm

## (1) 1号墳穴式住居跡

**構造** 墳丘の北西隅にあり、表上直下の暗黄褐色地山面で検出されたものである。丘陵の斜面に位置しているため全般的に遺存状態が悪く、わずかに南壁、東壁と西壁の一部を残すのみで、北壁はすでに失なわれていた。規模は完存する南壁長が4.9mあることから他の三壁もこれとほぼ同数値を示し、方形プランを有するものと推定される。壁は南東隅付近が最もよく残っており、高さ15cmを計る。床面は丘陵の傾斜に沿ってゆるやかに傾斜し、踏み固められた形跡は認められなかった。なお、竪穴内は柱穴等のピットは皆無で、周囲にもピットは全く検出されていない。内部には黒褐色土が堆積し、これに混じって床面から遊離した状態で土師器を主体とする土器片が集積していた。土師器は小片で完形に復し得るものはないが、器種としては甕、瓶、壺、土製支脚等がみられる。須恵器には輪状のつまみをもつ蓋と、これに組み合う环があり、ほかに數点の器種不明の破片が含まれていた。これらは住居跡における日常什器としての組み合せを示しているが、床面の状態



第9図 1号住居跡実測図 (1以東器、2・3章、4~6土製支脚、その他は土師器片)



第10図 1号住居跡出土遺物実測図

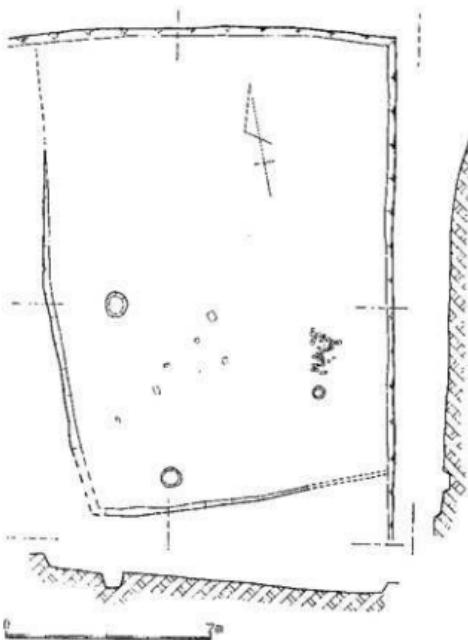
及び敷穴内外にピットが存在しないことなどから俄に住居跡とは判断し難いものである。

**遺物** 屋上遺物（第10図）のうち、須恵器には蓋と身がある。蓋（1）は頂部に同軸利用のヘラ削りを施し、輪状つまみをもつもので、縁端部を折り上げ器高は低い。これとセットをなす身（2）は底部を糸で切り離したのちヘラで粗く調整し、外傾する高台をつける。底部と11縁部の境は不明瞭で11縁部はやや外傾する。

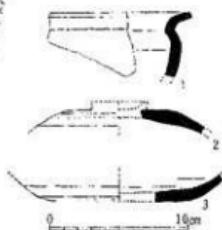
土師器は甕・瓶がある。甕（3～6）は10個余りあり、大きさはそれぞれ異なるが、いずれも流れ肩で、最大径が胴部下方にあるとみられるものである。内面には顕著なヘラ削りがみられ、外面は刷毛目調整のなされているもの（3、4）とそうでないもの（6）がある。瓶（7）は、肩に張りがなく外反する口縁部をもつもので、これには胴上部に8、9の把手がつくものと考えられる。器面の調整は外面刷毛目、内面ヘラ削りでなされている。

このほか土製砧として土製支脚と窓片がある。土製支脚はともに円柱状の粘土塊頂部に三枝をつくっている。窓片には焚口のツバ、基部などがあるが、全形は窓えない。

須恵器の环と蓋の特徴などから、これらは奈良時代後半に属するものと考えられる。



第11図 2号住居跡実測図

第12図 2号住居跡出土  
土器実測図

## (g) 2号堅穴式住居跡

**構造** 墳丘の北東隅付近で検出されたものである。1号住居跡同様丘陵斜面に位置しているため遺存状態はきわめて悪く、西壁と南壁の一部を残すのみであった。西壁残存長3.5m、南壁残存長2mで、これらがほぼ直角に交わることから方形プランを有する堅穴と推定されるが、全体の規模については明らかでない。この堅穴も表土直下のきわめて浅い位置で検出され、壁高は南東隅でわずかに20cmが残されていた。床面はやはり丘陵の斜面に沿って若干傾斜し、軟弱な状態で固く踏みかたためられた形跡はみられない。ただし、堅穴内には浅い3箇のビットがあり、1号住居跡とはやや趣を異にするものであった。また、遺物の出土量も少なく、わずかに須恵・土師器の小片が出土したにすぎない。

なお、検出されたビットは位置、規模等から柱穴とは認め難いものであった。床面の状態や掘立柱を伴わないことなどからすると、あるいは先の1号住居跡と同様な性格をもつものであろうか。

**遺物** 器形のわかるものは僅少で、第12図の1は鉢形土器で口縁部は外反して短く、比

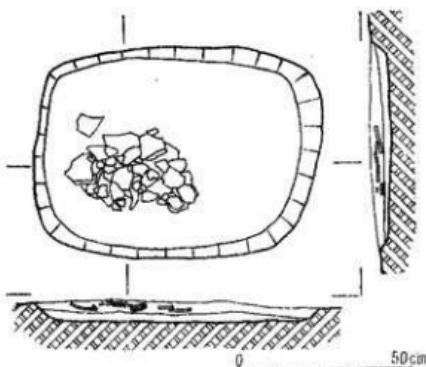
較的肩部の張りの少ないものである。2は輪状つまみをもつとみられる蓋の天井部、3は底部の破片である。

#### (3) 1号土壙

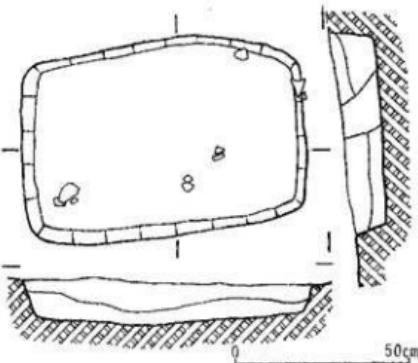
墳丘の東側墳標線付近に穿たれた土壙で長径80cm、短径60cmの削丸長方形プランを示す。表土直下の浅い位置で検出され、深さは検出面から壙底まで約10cmある。壙内には壙底に厚さ4cmの木炭層、その上層に暗黒褐色土層が堆積していた。遺物としては暗黒褐色土層中に土師・須恵器の破片が含まれていた。土師器は2個体分の瓶形土器口縁部の破片がある。いずれもわずかに外反する単純口縁をもち、外面は刷毛目、内面にはヘラ削りが施されている(第15図1)。須恵器は器種不明の条切底を有する底部の破片である(2)。

#### (4) 2号土壙

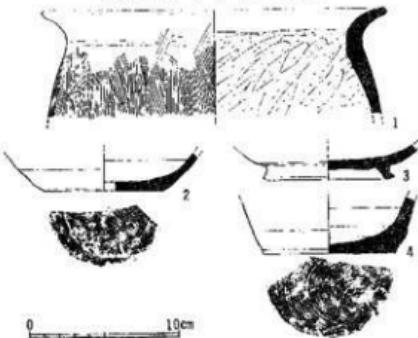
西側墳標線付近にあり、これも表土直下で検出された。長径85cm、短径58cmの削丸長方形を呈し、深さは約10cmを計る。壙内の土層の堆積状態は一部樹根等により擾乱されていたが上層に暗黒褐色上、下層には木炭層がみられ、1号土壙と同様な様相を示してい



第13図 1号土壙実測図



第14図 2号土壙実測図



第15図 1・2号土壙、瓶状逆掛出土土器実測図

た。土壤に伴う遺物としては器種不明の土師器小片若干がみられた。規模、形状等から本土墳は1号土墳と同様な性格をもつものと考えられた。

#### (5) 溝状遺構

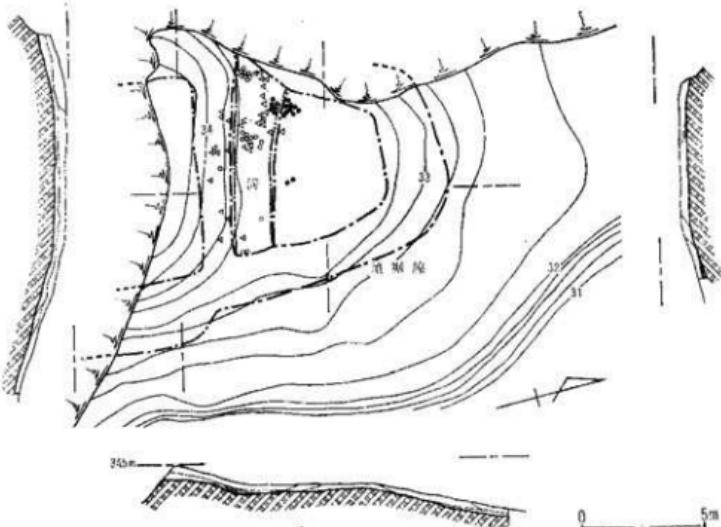
古墳とは直接関係ない遺構で、西側墳周線に沿って南北に走る溝である。溝内には黒褐色土が堆積し、土層中には糸切底及び高台を有する須恵器底部片（第15図3、4）が含まれていた。残存する溝の長さは5.6m、幅1.8mで深さ10cmを計る。

以上墳丘の周囲に存在する各遺構は、性格その他については必ずしも明らかにし得なかったが、出土遺物の様相からするといずれも奈良時代に属するもので、それぞれに密接な関係を有するものと考えられる。

### 3. 2号墳

#### (1) 墳丘の調査

1号墳の北西約50mの地点に當まれており、1号墳より2mあまり高所に位置している。墳丘は西側の一部と南側の大半をすでに消失していたが、くびれ部に接続するとみられる後方部の一部と前方部が残されており、前方後方墳と推定された。主軸は前方部を北に向ければ南北方向を示している。



第16図 2号墳墳丘実測図（△埴輪円筒、○古墳関係遺物、●奈良時代土器の出土地点を示す。）

残存部の規模は長さ11.5m、後方部幅13m、くびれ部幅10m、前方部長さ8.5m、前方部先端幅5mで、これらからすると、もと全長20mあまりあったものと考えられる。高さは、前方部先端側から計測すると後方部で約2m、前方部で1mあまりある。

墳丘の築成にあたっては、地山に簡略な切削加工を施し、盛土も少なく加工壙上面に、後方部で約50cm、前方部に30cmあまりの暗黄褐色土、暗褐色土を感じているにすぎない。これは古墳が丘頂に位置しているという自然地形の制約からくるものであろう。なお旧表土とみられる土層は認められなかった。あるいは墳丘の築成に際し、旧表土を除去して墳丘の地山加工壙を清めたものであろうか。注意すべきは、くびれ部に浅い溝が掘り込まれていることで、この溝は後方部壙に沿って東西方向に走る。長さは8.5m、深さ12cmを計る。溝内には墳丘の盛土を構成する暗黄褐色土が流入していた。墳形はこの溝の存在によってあたかも大小2基の方方形が並列しているかのような感を呈し、一般の前方後方墳とはやや異なる形状を示している。しかし、墳丘側は前方後方形に加工されており、これが前方後方墳を構築する意識のもとに築かれたものであることを示していた。このような異形の前方後方墳としては、同じく意宇川下流平野の松江市大草町岡出山1号墳に典型的な例がある。ほかに前方部と後方部を意識的に分離しようとしたものとして松江市大庭町向山西<sup>(註9)</sup>2号墳をあげることができる。

なお、残丘部及びその周囲には埋葬施設は認められなかった。

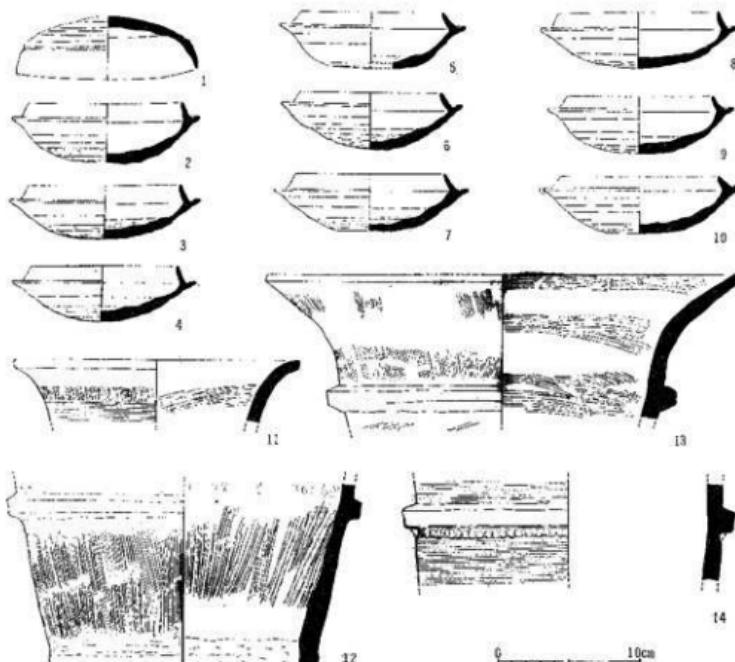
外部施設としては葺石はみられなかつたが、後方部北側斜面からくびれ部溝にかけて埴輪円筒片が検出されている。ただし、これらはいずれも原位置を失うものであった。

遺物はくびれ部のほぼ中央に須恵器蓋環が10個体分破片の状態でまとまって出土し、ほかに後方部北側斜面や溝内西端部などで土師器小片が散見された。これらはいずれも墳丘の築成時あるいはそれにきわめて近い時期のものと考えられるもので、主体部に供獻される副葬品とは異なり、墳丘の斜面等でとり行なわれたとみられるある種の埋葬儀礼に用いられたものと推定された。こうした類例は、松江市馬潟町灘山古墳、安来市佐久保町永神古<sup>(註10)</sup>墳、同西赤江町宮山6号墳などでも注目されている。実体は明らかでないが、あるいは祭前祭などと言った埋葬儀礼の一端を示すものであろうか。

## (2) 遺物

出土遺物は須恵器蓋環1、身9と岩下の土師器片、埴輪円筒片である。以下、器種別に個々についての説明を加える(第17図)。

須恵器 蓋環蓋(1)は焼きひずみがあり、体部と天井部の境に鈍い稜線がみられる。天井部には粗い方向不明のヘラ削りがなされ、内面は中央を不整方向のナデで調整する。

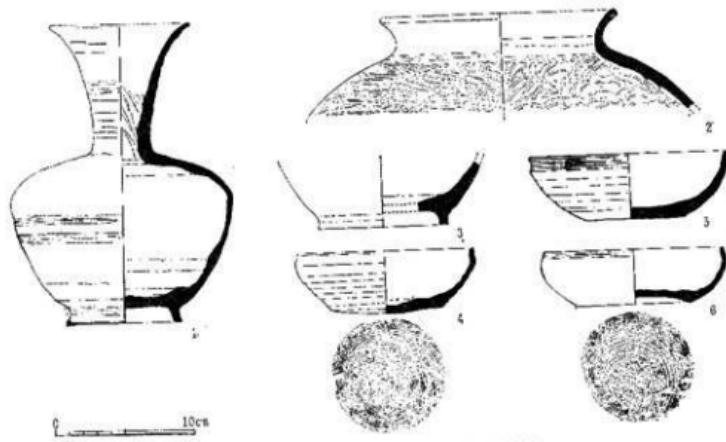


第17図 2号墳出土品実測図

蓋坏身（2～10）は、いずれもたちあがりが内傾し、口径は10～11cmで規格的につくられた可能性が強い。底部に簡単なヘラ削りがなされ、その方向は不明な1個を除くと他は全て時計回りと逆方向を示している。内面の底部は不整方向のナデで調整され、他はロクロナデがなされている。

埴輪円筒 図示し得るものは僅少であるが、口縁部は底下段のタガから底面に向ってすぼまり、通例の埴輪円筒とは、口縁部の外反度その他においてやや越の異なるものである。タガはいずれも粘土紐を貼り付けたもので、タガ下端の剥離面に一部凹凸のみられるもの（14）もある。器面は内外とも刷毛目で調整され、基部の内面はヘラ削りが施されている。なお、製作技法その他詳細については破片のため、不明である。

土師器 いずれも細片で図示しなかったが、器種としては高杯などが含まれている。



第18図 奈良時代土器実測図

#### 4. その他の遺物

このほか前方部西南隅付近からガラス質に固く焼きしまった粘土塊とともに須恵器片の出土をみたが、これらは古墳に伴うものではなかった。

須恵器（第18図）には全形を窺えるものとして長頸壺1、壺3があり、ほかに蓋・壺・蓋等の破片もみられる。長頸壺（1）は高台のつくりもので、頭部の外面に沈線があり、内面にはしほり目が観察される。壺には高台のつくりものとそうでないものの2種ある。高台のないもの（4～6）はいずれも底部に糸切痕がみられる。高台付壺（3）は体部が直線的に立ち上るもので高台と体部の境は不明瞭。

これらの須恵器は概ね奈良時代後半の特徴を有するものとみてよかろう。

なお、これと共に発見された粘土塊にはスサが多量に混在し、窓壁塊と呼べられた。

## 5 小 結

以上のとおり、才ノ岬丘陵には 2 基の古墳をはじめとして奈良時代の各種遺構も存在していたことが判明したが、ここでは主として古墳の年代観および周辺の古墳群との関連などについて若干の私見を述べ、さらに二、三の問題点にも触れて報告の納めとしたい。

1 号墳は一辺 15m あまりの小規模な方墳で、墳央部に中心主体の木棺直葬土塚（第1 主体）、墳丘北側斜面に須恵器火形盃を埋置した土塚（第2 主体）を伴うものであった。なお、葺石、埴輪等の外部施設は全くみられない。埋葬施設のうち第2 主体は、その位置などから二次的な埋葬と考えられるもので、本墳の築造年代はまず第1 主体の出土品およびその在り方などによって判定されるものと考えられる。

第1 主体は箱形木棺を直葬したとみられる素掘りの土塚で、各種多数の鉄製武器、工具類が副葬してあった。小規模な墳丘と簡単な内部構造をもつ古墳のなかで、このように多量の鉄製品を伴うものはこれまでほとんど知られていない。これら多数の鉄製品は、その出土状態から、剣・直刀・鎌は棺内、槍は棺外側、斧・鎌・壁・刀子の工具類は棺上に置かれていたものと推定された。これに類似した各種鉄製品の組み合せおよびその在り方を示すものとして、大原郡加茂町神原神社古墳<sup>(注13)</sup>が知られている。神原神社古墳は狭長な笠穴式石室を内部構造とするもので、内室から景初三年銘の三角縁神獸鏡をはじめ多量の鉄製品を出土した典型的な前期古墳である。ただ神原神社古墳出土の鉄鎌が盤頭式に属するのに対して才ノ岬1 号墳のそれは長頭式の特徴をもつものである。一般に長頭式鎌は、防衛用の甲冑類の発達と戰闘方式の変革にもとづいて 5 世紀半ばに出現するものといわれている<sup>(注14)</sup>。そうとすれば、鉄製品の組成とその取り扱いに共通性が指摘されるものの、両者の間にはかなりの時間的な差があるものといえる。ところで、山陰では 6 世紀後半以降須恵器の普及に伴って、各種埋葬施設にもほとんど例外なくこれが副葬されるという現実がある。<sup>(注15)</sup>こうしたことから、1 号墳の築造年代は大まかに 5 世紀の後半から 6 世紀の前半に求められるが、さらに細かくいえば鉄製品の組成およびその在り方が神原神社古墳のそれと類似するなど、そこに古式の様相が残されていることから 5 世紀後半に築造されたものと考えたい。

才ノ岬1 号墳出土の鉄鎌と同様な長頭式鎌は、これまで出雲地方で安来市黒井田町毘尻<sup>(注16)</sup>、同西赤江町仲仙寺<sup>(注17)</sup>2 号墳、松江市馬潟町般音寺<sup>(注18)</sup>2 号墳、八束郡玉湯町築山古墳<sup>(注19)</sup>等で出土している。このうち、毘尻古墳は前方後円墳、築山古墳は円墳で、ともに内部構造として舟形石棺を内蔵し、概ね中期中葉から後半の築造とされている。また、仲仙寺 2

号墳は一辺約12mの方墳で、墳央部の木棺真跡土壙内から直刀1、平模式鏡1、長頸式鏡22が出土している。この古墳では、周溝内に古墳築造後に設けられた土壙が存在し、内部から土師器高环が出土している。須恵器は出土していないが土師器高环は、松江市吉田町<sup>(注21)</sup>薬師山古墳からⅠ期の須恵器とともに出土した高环と類似し、これが5世紀後半に属することを示している。こうしたいくつかの出雲地方における長頸鏡出土古墳の類例からも、才ノ峰1号墳を5世紀後半に位置付けることは首肯されよう。

二次的な埋葬施設とみられる第2主体は、壇底に須恵器大形壺の小破片を敷きつめ、その上に遺体を安置して、これを大形の破片で被覆したものと考えられるものであった。このように上器を棺器として転用したものは、飯石郡三刀屋町松本古墳<sup>(注22)</sup>、安来市吉佐町八幡<sup>(注23)</sup>山古墳をはじめいくつかの類例があるが、それらはいずれも古式土師器壺であり、須恵器を用いたものはほとんど知られていない。ただ、本書所収の安来市吉田町大坪3号墳でも須恵器片で遺体を被覆した主体部が検出されていることからすれば、この時期にも土器を棺器として用いる風習のあったことが知られる。埋葬の時期は、墳丘における位置などから中心主体の埋葬に近いものと考えられる。こうした在り方は先にあげた仲仙寺2号墳でも指摘されている。なお、山土した須恵器は内面のタタキ目がわずかに消去された形跡認められることなどや古式の様相をもつものといえる。

2号墳は、すでに墳丘の大半を消失していたため主体部は認められなかつたが、もとは全長20mあまりの小形の前方後方墳と考えられ、墳丘斜面ないしぐれ部溝から車輪円筒片と須恵器片が出土している。出土した10個体の須恵器蓋环はいずれも山陰の須恵器第Ⅲ期の特徴を有するもので、本墳が6世紀後半に築造されたことを示している。

2号墳で注意されるのは、くびれ部に溝が存在することで、これによって前方部と後方部が意識的に分離され、あたかも大小2つの方形墳で形成されているかのような感を与えていることである。このように通常の前方後方墳とやや異なる墳形をもつものとして松江市大草町岡田山1号墳が知られているほか、前方部と後方部を区分するという同様の意識のもとに造られたと考えられるものに松江市大庭町向山西古墳がある。<sup>(注25)</sup> 前方部と後方部を分離することにどのような意味が内包されているのか明らかでないが、今のところ意宇川下流平野を中心とした種異形の前方後方墳がいくつか存在している。同じく前方後方墳といってその中にこのような変種のみられることは、今後当地方の古墳文化を解明する上で興味ある問題を提起するものといえよう。

以上のように才ノ峰における2基の古墳は、それぞれ1号墳が5世紀後半に、2号墳が6世紀後半に比定できるものであった。両古墳が同一丘陵上にあることから便宣上古墳群

として取り扱ったが、両者には時間的に大きな隔りがあり、その関係については積極的な資料を得ることができなかった。

ただ、1号墳が築造された5世紀代の周辺の古墳分布をみると注目すべき事実がある。すなわち、意宇川下流平野における古墳分布の在り方が古墳時代の全期間を通して方墳、前方後方墳を主体としているのに対し、この時期になると突如として大形前方後円墳が幾点的に出現することである。当該時期の前方後円墳として、才ノ峠古墳群の北側約500mの大橋川を見おろす丘陵上に手間古墳<sup>(註1)</sup>、その南西方向の丘頂に井ノ奥4号墳<sup>(註2)</sup>、大橋川を挟んだ対岸に魚見塚古墳等県下でも有数の大形古墳が築かれる。最近の調査で明らかになった井ノ奥4号墳は、空濠、外堤をめぐらす全長57.5mの前方部の低く短い前方後円墳で、外部施設として葺石、埴輪円筒を伴うものである。内部構造については不明であるが、墳形や空濠から出土した鳥形埴輪、埴輪円筒等から5世紀後半頃の築造とされている。手間古墳、魚見塚古墳については内容は明らかでないが、いずれも全長60~70mの大形前方後円墳で、外形からすると5世紀代のものと考えられる。

これら大形前方後円墳はともに意宇川下流平野北東端の大橋川を見おろす丘陵上に分布し、かつその築造年代はいずれも5世紀代に求められるものである。こうした大形前方後円墳の出現は、この平野周辺のみでなく、安来平野、宍道湖南岸部、巣川平野東部においても認められる。

前方後円墳が大和朝廷と密接な関連のもとに築かれたものとされているだけに、才ノ峠1号墳とほぼ併行する時期、すなわち5世紀代のある時期に突然に大形前方後円墳が出現することは、大和朝廷の政治支配権の拡大と密接に関係する事象として注目すべきことである。しかも、意宇川下流平野ではその後、前方後円墳の顕著な展開はみられず、6~7世紀になんでも引き続き才ノ峠2号墳によって示されるように伝統的な方形墳が主流をなしている。

このことは、單に古代出雲の在り方のみにとどまらず、広くは日本古代国家の在り方にも関連する興味ある問題といえよう。

註1 岡崎雄二郎「松江市井ノ奥4号墳の調査」『考古学ジャーナル』No.120(昭和51年)

2 山本清「古墳」『島根県文化財調査報告』第5集 島根県教育委員会(昭和43年)

3 註2と同じ

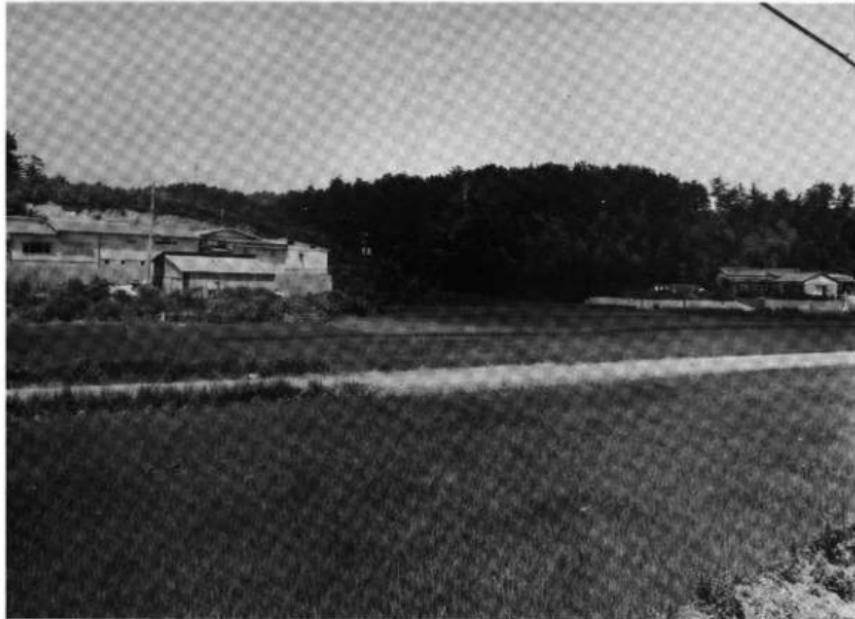
4 註2と同じ

5 註2と同じ

6 近藤正・前島己英「島根県松江市の墳土埋葬」『考古学雑誌』第57巻第4号(昭和47年)

- 7 許2と同じ
- 8 門脇俊彦「岡山古墳」『八雲立つ風土記の丘・海辺の文化財』島根県教育委員会（昭和15年）
- 9 門脇俊彦氏調査（昭和49年）
- 10 前島己益・一山典・松木岩雄「松江・宍山古墳の発掘」『八雲立つ風土記の丘』No.11（昭和50年）
- 11 内田才・前島己益氏調査（昭和47年）
- 12 島根県文化財愛護協会『宮山古墳群』（昭和49年）
- 13 球磨法螺「神原神社境内古墳発掘調査概況」「季刊文化財』第18号（昭和47年）  
佐間法螺「島根県加茂町神原神社古墳出土の最初三年鉢は作重列式神獸鏡」「考古学雑誌』第58巻第3号（昭和47年）
- 14 小林龍一「弓矢と甲冑の変遷」「古代史発掘』6（昭和15年）
- 15 山本清「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」所収（昭和46年）以下、須恵器については全て山本清氏の編年に準ずる。
- 16 山本清「山陰の石棺について」「山陰古墳文化の研究」所収（昭和46年）
- 17 島根県教育委員会『仲仙寺古墳群発掘調査報告書』（昭和46年）
- 18 門脇俊彦「松江・鹽竈寺古墳群」「島根県舞鶴文化財発掘調査報告書』第IV巻 島根県教育委員会（昭和47年）
- 19 山本清『玉賜町史』上巻（昭和36年）
- 20 註16と同じ
- 21 山本清「鳥取大学敷地墓跡山古墳遺物について」「山陰古墳文化の研究」所収（昭和46年）
- 22 島根県教育委員会『松本古墳調査報告』（昭和38年）
- 23 山本清「小浜柄山古墳について」「山陰古墳文化の研究」所収（昭和46）
- 24 東森市良「山陰地方発見の盞形とその特色」「考古学研究』第14巻第2号（昭和42年）
- 25 註8と同じ
- 26 註9と同じ
- 27 註2と同じ
- 28 註1と同じ
- 29 島根大学考古学研究会『皆田考古』第13号（昭和47年）

図版 I 才ノ峰古墳群



1. 古墳群遠景（東南から）



2. 1号墳発掘前の墳丘（東南から）



1. 1号墳第1主体  
(西から)



2. 第1主体鉄製品出土状態



1. 1号墳第2主体（東から）



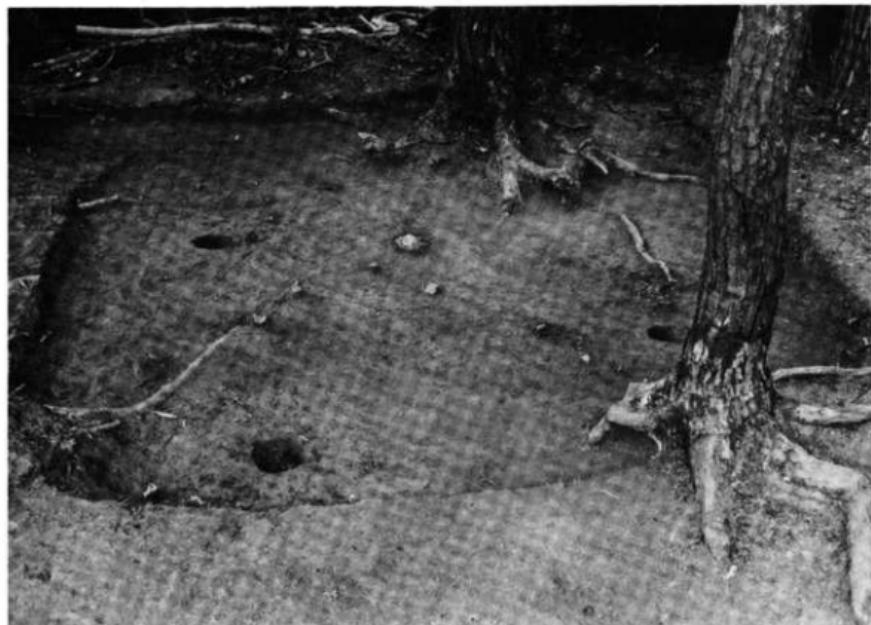
2. 第2主体検出状況(1)



3. 第2主体検出状況(2)

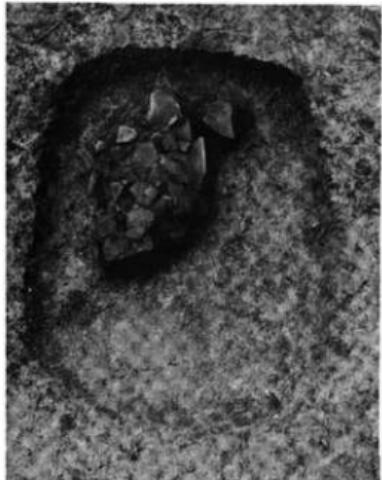


1. 1号住居跡（南から）

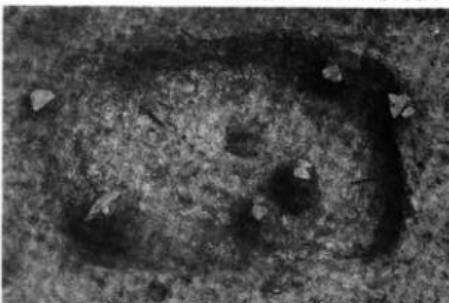


2. 2号住居跡（南から）

図版V 才ノ崎古墳群



1. 1号土壙



2. 2号土壙（上）溝状遺構（下）



3. 発掘後の1号墳墳丘と周囲の遺構（西から）



1. 1号墳第1主体出土鉄剣、槍、直刀



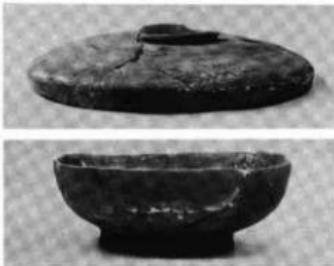
2. 第1主体出土  
鉄製工具類



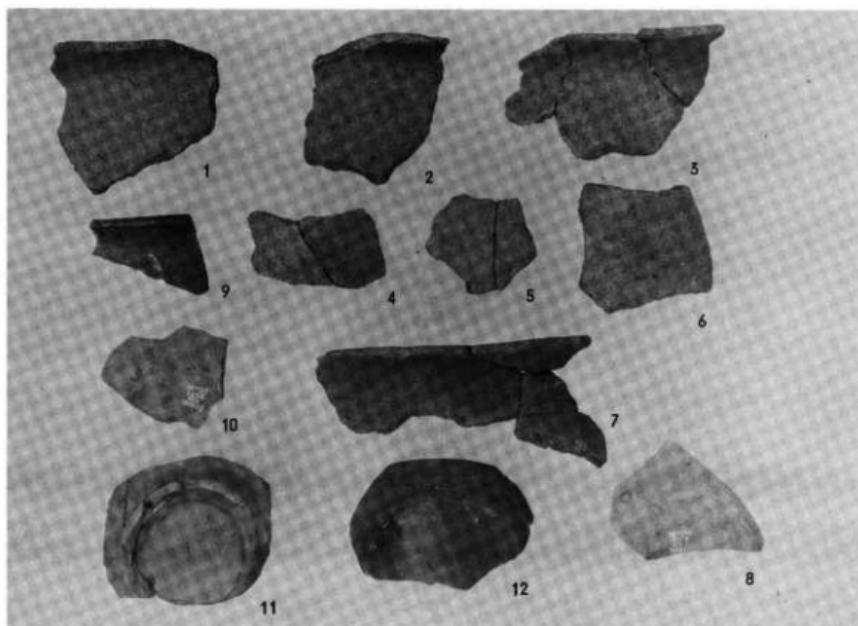
3. 第1主体出土鉄鎌



4. 第2主体出土須恵器棺



1. 1号住居跡出土遺物



2. 1号土壙(1~8)、2号住居跡(9・10)、溝状遺構(11・12)出土土器



1. 2号墳発掘前の墳丘（北から）



2. 2号墳発掘後の墳丘（北から）



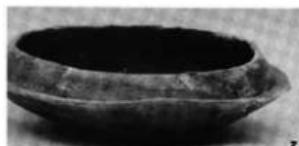
1. 2号墳墳丘斜面須恵器出土状態



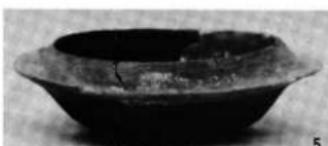
1



2



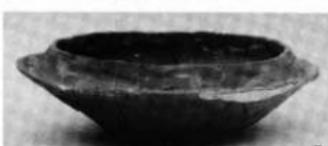
3



5



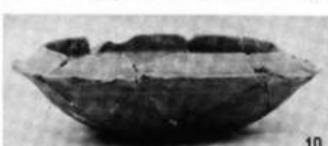
6



7



9



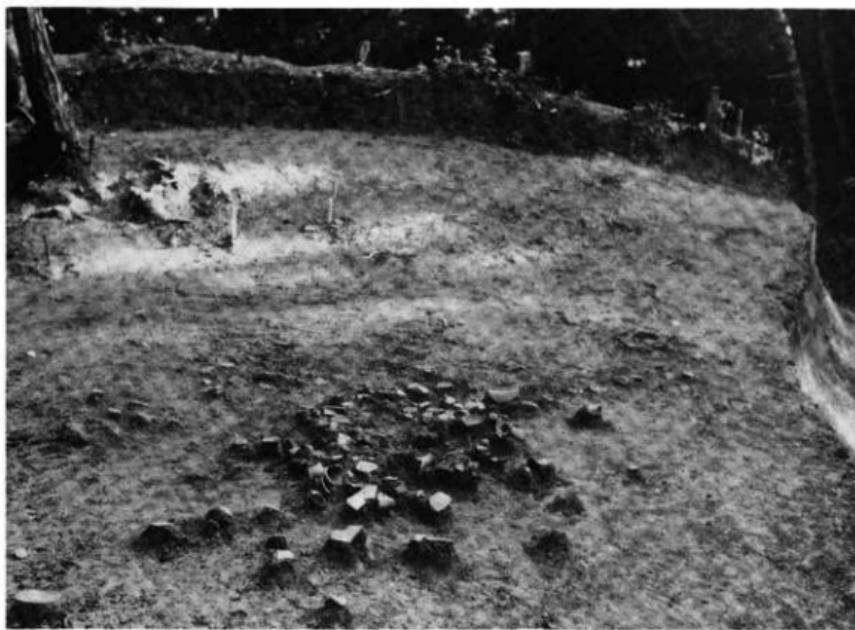
10

2. 2号墳出土須恵器  
(番号は実測図の  
それと同一)

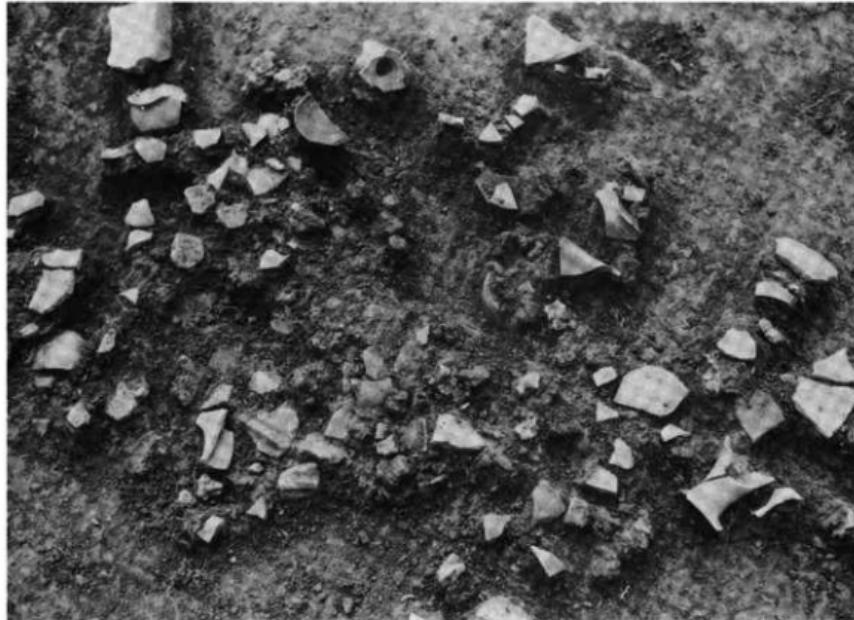
図版X 才ノ峰古墳群



1. 2号墳出土埴輪円筒



2. 墓丘上の奈良時代遺物出土状態



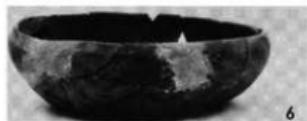
1. 奈良時代遺物出土状態細部



4



5



6



2. 奈良時代の遺物（番号は実測図のそれと同一）



1

### III 大坪古墳群

—安来市早田町字大坪所在—

1. 調査の経過.....	49
2. 位置と環境.....	50
3. 古墳群の概要.....	50
4. 発掘遺構と遺物.....	52
(1) 3号墳.....	52
(2) 崖穴式住居跡.....	59
(3) その他の遺構と遺物.....	60
5. 小結.....	62

## 挿 図 目 次

第1図 古墳群の位置.....	50
第2図 古墳分布図.....	51
第3図 3号墳墳丘実測図.....	53
第4図 第1主体須恵器出土状態.....	54
第5図 第1(左)・2(右)主体実測図.....	55
第6図 土 墓 実 測 図.....	56
第7図 第1主体出土須恵器実測図.....	57
第8図 第1主体・土壤出土土器実測図.....	58
第9図 始穴式住居跡実測図.....	59
第10図 始穴式住居跡出土上器実測図.....	59
第11図 土 墓 実 測 図.....	60
第12図 土壌内出土上部器実測図.....	61

## 図 版 目 次

図版I-1 古墳群遠景	図版IV-3 第1主体出土須恵器(1)
図版I-2 3号墳発掘前の墳丘	図版V-1 第1主体出土須恵器(3)
図版II-1 発掘後の墳丘	図版V-2 墳丘裾部土壤出土七七器
図版II-2 第1・2主体	図版V-3 始穴住居跡
図版III-1 第1主体検出過程	図版V-4 始穴住居跡山上弥生式上器
図版III-2 第1主体須恵器出土状態(1)	図版VI-1 土壌内土師器出土状態
図版III-3 第1主体須恵器出土状態(2)	図版VI-2 土 墓
図版IV-1 墳丘裾部の土壤	図版VI-3 土壌内出土上部器坏
図版IV-2 墳内の土師器出土状態	図版VI-4 同上底部

## 1 調査の経過

安来市早田地区で今年度調査の対象となった大坪3号墳の発掘は川原和人を担当者に昭和50年12月10日から翌51年2月26日までの46日間を費して行った。発掘調査は蓮岡法暉、勝部昭の協力を得て主にト部吉博が、これに当った。

当初この調査は大坪丘陵に分布する2・3・4・5号墳の4基の発掘調査を予定していたが、今度は予備調査的な性格をもつ調査であり、また、丘陵上に存在する個々の古墳を群として把え将来に期する意味で発掘は墳丘がひときわ高く、その他の古墳を検討する資料として比較的良好と考えられた3号墳のみとし、他は地形測量図の作成により個々の位置関係を把握することとした。測量は開放トラバースによって基準点を設定し、100分の1の平板測量を行なった。等高線は大坪丘陵最高所の1号墳々頂を0点として50cm毎に記入することとした。

3号墳の発掘調査は昭和50年12月10日、雑木の伐採から始めて墳丘とその周囲の平坦面の測量を行ない、その結果約13mの円墳であることが判明した。墳丘の発掘は4分法によりこれを行ない、その集成法を追求するため土層觀察用の畔を東西、南北に各一本づつ残した。12月25日墳尖部において埋葬施設の掘り込み面を確認したところで年末年始の休みに入り、年が明け1月7日から再び現場を再訪し、埋葬施設の追求を行なった。最初に墳尖部の東側で第2主体を検出し、続いて第2主体にほぼ併行して掘りこまれた第1主体を確認した。この調査と併行して墳頂部の調査を行ない、墳丘の南側において溝を確認、東側では土師器と須恵器を埋置した上層、また弥生時代の略穴式住居跡の一部を検出した。さらに墳頂北西の平坦面にトレンチを入れ、これによって多量の木炭と土師器壊を伴う土壇を確認した。

この調査は冬場にかかり、終始降雪雨に悩まされた上、地山の粘性が強いという悪条件が拂土・運搬等作業能力を低下させ、また実測・写真撮影等についても困難がつきまとった。ともあれ2月9日に一応の調査を終了して2月20日から29日迄の間埋廻作業を行ない今回の調査の全てを終了した。

出土遺物は八雲立つ風土記の丘資料館に収入し、整理は三宅博士（島根県埋蔵文化財調査員）塙井伸二、浪花秀明（愛知学院大生）、内田翠雄（青山学院大生）、花谷浩（京都大生）、勝部衛（広島大生）氏の協力を得てこれを行なった。なお、調査にあたっては安来市教育委員会をはじめ九重町和田森啓三氏、宿舎をお願いした田村山義氏等地元関係者の方々

のお世話になった。また遺物の検討については島根大学名誉教授山本清、奈良国立文化財研究所町田章尚氏から有益な指導と助言をいただいた。

## 2 位 置 と 環 境



第1図 古墳群の位置 (○印)

安来平野には、中国山地に源を発し、中海に注ぐ伯太川、吉田川、飯梨川の3本の川が流れている。このうち伯太川は東側を流れ、この川が母里を抜けて安来平野の東寄りにある標高87.5mの城山山塊をかすめて通る付近には東岸に2つの小さな独立丘陵がある。大坪古墳群をのせた丘陵はその一つ、早田町と九重町にまたがる東西150m、南北250mの細長い丘陵で、標高35m、水田との比高差約20mを計る。このあたり

は安来平野のなかで最も遺跡の密集した地域にあたり、「ハツ手の葉」状に複雑な出入りをみせる丘陵には各種多数の遺跡が分布している。

このうち付近の主なものをあげると、大坪丘陵の東隣に地獄谷の丘陵があり、ここには(註1)九重遺跡、染屋平遺跡、染屋平古墳群、杉戸横穴群など集落跡、土壙墓、古墳、横穴等多くの遺跡が分布している。また細い谷をはさんで大坪丘陵の北側には早田の丘陵があり、(註2)堂面遺跡、(註3)叶谷遺跡等があり、西隣の下山丘陵には下山古墳群が存在する。これらのうち特に九重遺跡、堂面遺跡など弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土壙墓群の存在することは古墳の発生をめぐる問題の解明に有力な手振りを与えるものとして注目される。これらの土壙墓群のあとをうけて營まれた、周囲の古墳や遺跡の在り方を検討すると大坪古墳群を含め、弥生時代後期から古墳時代全期を通して有力な共同体を生成していた跡をたどることが可能であろう。

## 3 古 墳 群 の 構 成

大坪丘陵は東西150m、南北250m、標高約35mの独立丘陵である。この丘陵の尾根は南からいったん北へ延び、それから曲って再び北に延び、細長い尾根上には平坦面がみられ

III 大坪古墳群



第2図 古 墓 分 布 図 (6号墳を除く)

る。これまで確認されている6基の古墳は全てこの平坦面に築成されている。

いま仮に1番南側の古墳を1号墳とし、順次番号を付して以下にその概要を記すと、1号墳は丘陵の最も高所に位置している。自然地形をうまく利用し見せかけ上、高い墳丘を思わせている。墳裾部径16m、墳頂部の径10.4m、高さ1mの円墳で、古墳群中最も大きく墳頂部には広い平坦面がみられる。2号墳は1号墳の北39mのところに築かれている。これは墳裾部径9.6m、墳頂部径2.6m、高さ1.7mの小円墳である。3号墳は2号墳の北19mのところにあり、やはり円墳で規模は1号墳に次ぎ13mを計る。4号墳は3号墳から25m北東に位置し、墳裾部径12m、墳頂部径5m、高さ1.4mを計る円墳である。5号墳は4号墳から20m北東に位置し、墳裾部径8m、墳頂部径4.6m、高さ0.9mを計る円墳である。6号墳は5号墳から75m北北東に築かれた円墳で、墳裾部径12m、墳頂部径6.8m、高さ1mを計る。なお、墳頂には深い盗掘痕が認められた。

大坪古墳群は以上の6基から成り、古墳群としても、個々の古墳をみた場合にも、それらの規模はさほど大きないのであるが、いづれも円墳によって構成されていることが注意されよう。

#### 4 発掘遺構と遺物

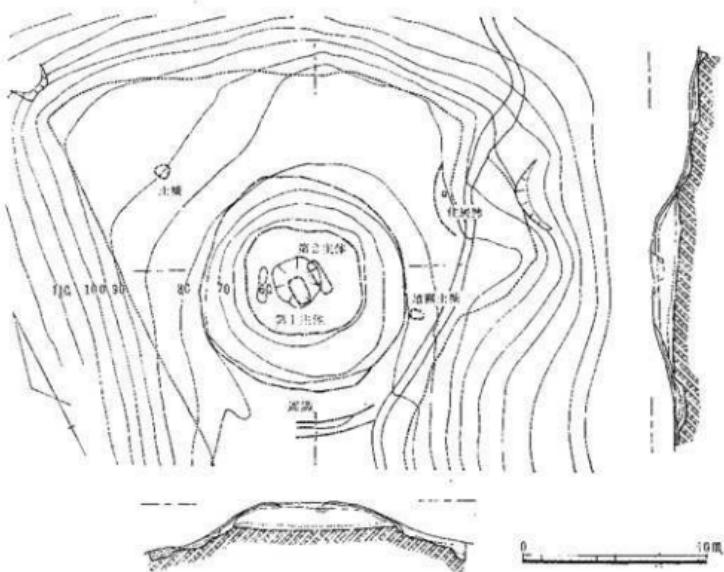
今回の調査で検出された遺構は3号墳で埋葬施設2と土壙1、墳丘外で堅穴式住居跡1と土壙1である。以下これらについて説明を加えよう。

##### 1. 3号墳

###### (1) 墳丘の調査

本墳は1号墳の北約55mの尾根上<sup>平</sup>坦部に位置し、その所在する地籍は安来市早田町324番地である。大坪古墳群の中では1・2号墳につぐ高所に営まれており、最高所の1号墳との比高差は約6mある。墳丘を取巻く東、西、北の三方には丘陵を整形して作ったと考えられる高さ3.5mの段状急斜面がみられ、あたかも「二段築成」を思わせるものがある。周囲の地形、段の在り方などからすると、この段は北東に近接して営まれている4号墳の築成以前に形成されたものと考えられる。3号墳は測量調査において墳裾部径13m、墳頂部径6m、高さ2mの円墳と考えられ、墳頂部中央において盗掘を受けた痕跡があった。

発掘調査は墳丘を4分法により注意深く掘り下げた。まず墳頂部西南の地表面に近い地点から須恵器片が出土し、付近に埋葬施設の存在が予想されたが、層序が乱れ、土が軟弱



第3図 3号墳 墓丘実測図

なところから、盜掘により擾乱を受けたものと考えられた。墳丘表面下40cmの所で赤褐色のしっかりした土を確認し、その上面の中央部と東側において2つの内部主体を検出した。このうち、中央部のそれは多数の須恵器片を伴う土壤であった。

また、これと併行して行なった墳裾部の調査で、南側から上縁幅3.2m、下縁幅2mの幅広い周溝を検出した。この周溝は墳裾全体には廻らず、南側においてのみ弧状に認められた。周溝の残存していた南側を除くと他は一部地山の風化した所もあって、築成時の墳裾線は不明瞭であった。しかし、断面に表われた土層の觀察の結果、本墳は墳裾部径13m、墳頂部径6.3mの円墳であることが判明した。なお、東側の墳麓部においては須恵器と土師器を伴う $0.8 \times 0.52$ mの土壤1を検出している。

上層の觀察などからすると本墳は次のような築成法によって造られている。すなわち、南側の墳裾に溝を掘り、他は地山に切削加工を加え、まず低い円形台状の土壠を形成する。ついで地山ブロックを含む赤褐色粘質土を厚さ0.6mから1mあまり盛り、さらにその上面に暗赤褐色粘砂土を盛り上げ、凹状土から高さ1.4mの墳丘を造る。土壠上には旧表土が存在することから特別な地ならしは行なわれなかったものと考えられる。

先にも記したように埋葬施設の掘り込み面はいずれも上部の赤褐色盛土上面であり、両者の先後関係は把え得なかった。また、下部赤褐色粘質土の盛土を行なった時点で埋葬施設を掘り込み、その後の暗赤褐色土を盛上げたものかどうか、盗掘坑のあることも関係して判然としない。

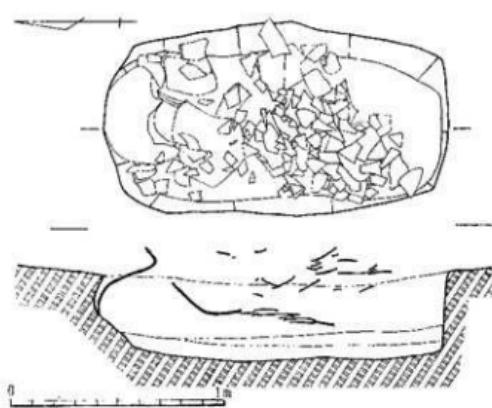
遺物としては主体部に埋置されていたものの他、暗赤褐色盛土、溝内、墳壠部に若干の須恵器片と、溝内より2点の埴輪円筒片が見られたにすぎない。埴輪片は図示し得ないほどの細片で、他からの混入品と考えたい。

#### (a) 内 部 施 設

墳頂部で2つの内部主体、墳壠部東側で土壤1を検出した。このうち、主体部については中央のものを第1主体、東側を第2主体とした。

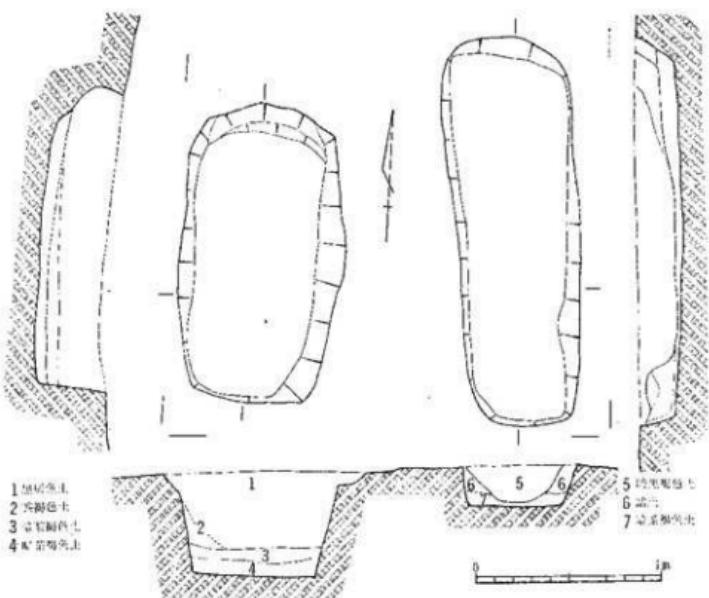
**第1主体** 墳丘のはば中央部に掘り込まれた素掘りの土壙で、長方形プランを有し、主軸をほぼ南北とする。この上層は表下40cmの赤褐色粘質土層で確認され、その規模は上縁の長さ1.62m、幅は北側で0.8m、中央で0.9m、南側で0.6mある。墳底は南から北に向って傾斜しており、長さ1.43m、北側で幅0.68m、南側で0.4mを計る。深さは上層突出面から0.57mある。なお、墳壁のうち北壁は内縁して掘り込まれていることが注意された。

七段内には須恵器大甌2、器台1、小形直口甌1が破碎された状態で集積していた(第4図)。それらの出土状態は南側上部で一部において盗掘を受けた形跡がみられたが、下部の北側から中央部にかけてのものは、ほぼ原状を保っていると考えられた。すなわち、北側では内縁する横壁に沿って大形甌の口縁から脇部にかけての大形破片が掘えてあり、



第4図 第1主体須恵器出土状態

これから中央にかけて  
は須恵器の比較的大き  
な破片が一部重複しな  
がら墳底を被うように  
置かれていた。しか  
も、この須恵器片群は  
墳底から約20cm前後上  
部に位置していた。こ  
うした在り方は、あた  
かも北側に頭部を向け  
て屍体を安置し、顔面  
上を口縁部から脇部に



第5図 第1(左)・2(右)主体実測図

かけての大破片、胸から足にかけては比較的小形の破片で被ったかのようである。なお、墳内からは須恵器以外の遺物は検出されなかった。

**第2住体** 第1主体の東側0.6mの所に、これとほぼ平行して掘り込まれている。長方形プランを有する素掘りの土壙で、主軸をほぼ北に向かって、規模は上縁の長さ1.94m、北側で幅6.3m、南側で4.6mあり、深さは七墳検出面から墳底まで0.23mを計る。検出面は第1主体と同様赤褐色盛土の上面で、墳丘表面下58cmである。墳底はほぼ水平に作られている。上縁幅、下縁幅共に北側が広く、おそらく屍体は北向きに安置されたものであろう。

棺材は残されていなかったが、土層観察用時に上縁幅0.52m、下縁幅0.15m、上縁長1.72m、下縁長1.55mの黒味がかった横断面U字形の落ち込みが認められたことから、舟底形の木棺が想定される。また、墳底には地山ブロックを含む固くしまった土がみられた。木棺を安置する際これを固定させるためのものであろう。なお、墳内には遺物は見られなかった。

**土壤** 墳丘の東側斜面で検出されたものである。不整長方形プランを示し、主軸を南東に向けている。規模は上縁で長さ0.8m、幅0.52m、墳底で長さ0.75m、幅0.43mを計る。墳底はほぼ水平に作られ、深さは北西部で0.13m、東側で0.05mである。

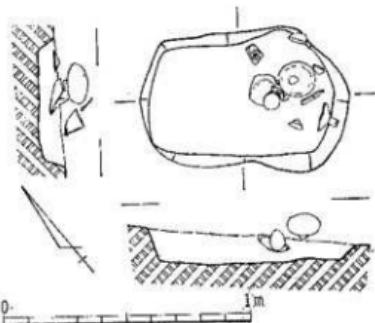
この土壤には境内に土師器高環  
6、土師器直口壺1、須恵器1が  
埋設されていた。土壤の位置や規  
模、遺物のあり方などから本土壤は  
埋葬施設というより、むしろ埋葬儀  
礼にかかわる遺構と考えた方がよさ  
そうである。

(a) 出土遺物

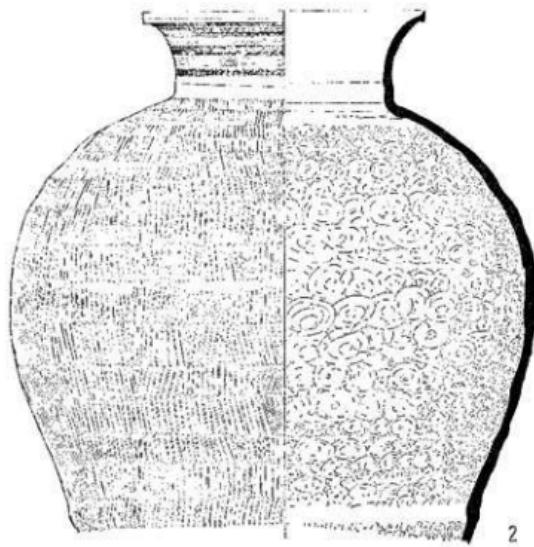
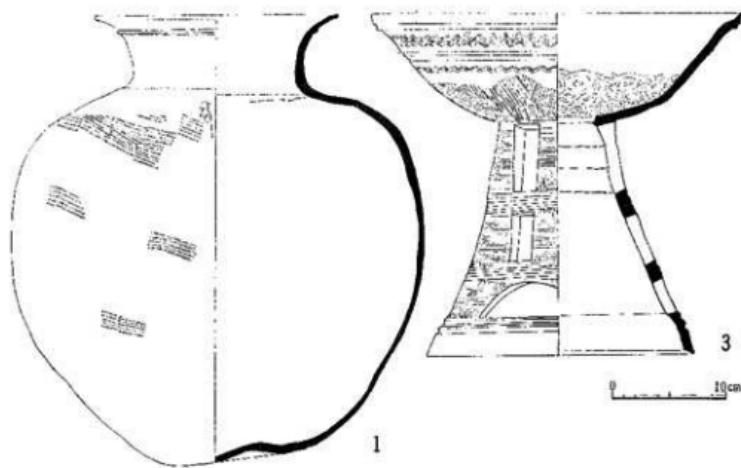
第1主体から須恵器の大形壺2、  
器台1、小形短頸壺1、墳丘東側の

土壤から須恵器の壺1、土師器の直口壺1、高杯6個体分が出土している。

まず、第1主体出土の大形壺(第8図1、2)のうち1は器高64cmで腹部中央に最大径  
をもつ。口頭部はゆるやかに外反し、口縁には外面に幅の広い凸帯がめぐる。底部は丸味  
が強く、焼きひずみがみられる。口頭部は内外とも回転ナデによって調整され、胴部はタ  
タキによって成形されている。ただし、内面のタタキ目は入念に磨消され、外面も右下が  
りの平行タタキ痕をかすかに残すにすぎない。特に底部には全くみられない。堅緻な焼き  
で、外面は黒灰色ないし茶褐色、内面は青灰黒色を呈す。胎土中には比較的大粒の砂粒が  
みられる。2は底部を欠失しているが、残存高75cmの大形壺である。口頭部はゆるく外反  
し、端部は上下に肥厚し鋭い稜をなす。口頭部外面はカキ目調整の後2単位の沈線が2段  
に廻らされ、その間を緻密な櫛描波状文が走る。櫛状工具は齒数11本単位と4本単位の2  
種が用いられているようである。胴部は外面に平行タタキ目、内面に同心円タタキ目が残  
り、1のような顕著な磨消はなされていない。灰白色を呈し、焼成は堅緻で、胎土中には  
若干の砂粒が含まれている。なお口頭部外面には薄く釉の付着が認められる。3は器高約  
30cmの大形器台である。环部は浅くゆるやかに内彎し、口縁は外反しながら短かく立ち上  
り、下端部が突出して鋭い稜をなす。脚部はハの字状に広がり、脚端部はわずかに内方へ  
すぼまる。端部は外面で接地し、段をもつ。环部は外面細い平行タタキ、内面は同心円タ  
タキで整形された後、上半部のタタキ目は削され、外面には凸線を挟んで、上下に緻密な  
櫛描波状文が施されている。櫛齒の単位は明らかでないが、波状文の総数は上段で13、下  
段で6条みられる。胸部はカキ目調整がなされた後、沈線で3つの文様帯を構成し、それ  
ぞれに2列の櫛描波状文が施される。さらに、上方の2段に長方形透し、下段に半円形の  
透しが3方に穿たれている。环部と脚部の接合は、粘土紐を補填して行なっている。なお、



第6図 土 塚 実 調 図



第7図 第1主体出土須志器実測図（縮尺 1・2は½、3は¼）

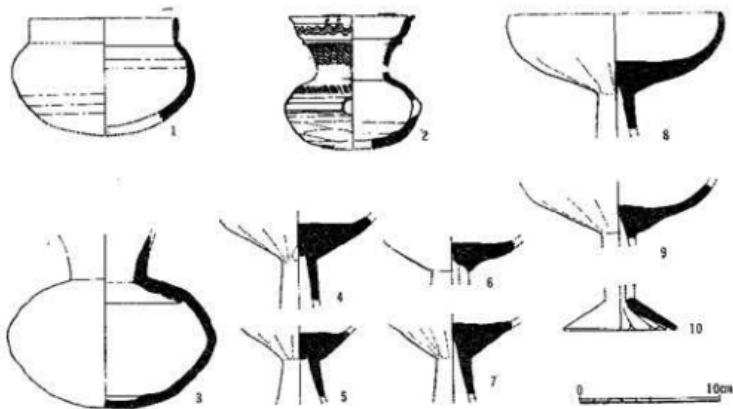


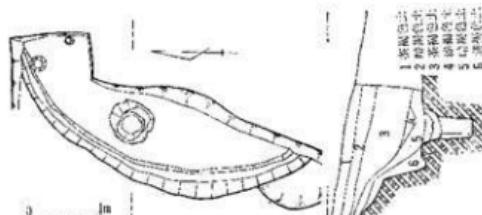
図8図 第1土体・土壌出土上器実測図

环部内面には緑色の釉が厚くかかっている。小形短頸壺（18図の1）は底部に広くへう削り痕がみられ、黄灰色を呈し、胎土中に若干の砂粒を含む。

次に土壤内出土の土器（第18図2～10）について述べる。須恵器の壺（2）は岡上復元によると器高約9.6cmの小形品である。口縁部は端部が2段に作られ、下端には鋭い稜角がみられ、体部は全体に扁平な球形をなす。外面上には口縁部と頸部に緻密な櫛描波状文が走り、肩部には櫛状工具による刺突文列が施される。頸部下半は入念なへう削りで仕上げられている。ロクロの回転方向は時計回り。3は扁平な脚部をもつ土師器の直口壺で、口縁部をぐく。器表面は風化しているが、一部に赤色顔料が認められる。土師器高壺（4～10）は完形に復し得るものはないが、环部は内側して立上り、脚部は筒部から大きく開いて端部に至る形式のものと考えられる。环部は墨画の風化が著しいが、内外とも上半部に横ナデ剥落のなされた形跡がある。なお、脚部と环部の接合にあたっては环底部には枘穴をあけ、これに脚部を挿入して环底部に内面から円板状粘土塊を充填したものようである。环部に比べ、脚部の上半部径が細く、内面にはしづり目がみられる。环底部の器壁が厚いこと、内面の小孔、接合部を指頭で押圧したような痕跡等は上記の接合法と密接に関係するものであろうか。

## 2. 竪穴式住居跡

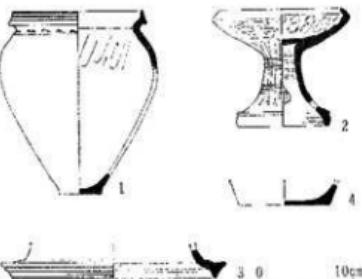
**構造** 3号墳の北東約10mから検出されたもので尾根の平坦部が斜面部へ移るあたりに営まれている。調査地区的関係で竪穴のごく一部分しか検知していないが、図1花



第9図 竪穴式住居跡実測図

端岩のはいらん上に掘り込まれており、その遺存状態は良好であった。検出部の形状からすると本跡は円形プランを有し、径5.2mあまりと推定される。壁高は50cmで、壁際に沿って幅16cm、深さ6cmの断面U字形の周溝が廻らされている。床面はほぼ平坦で地山が硬質なことから特に踏み固めたような形跡はみられなかった。ピットは主柱穴と考えられるものを1個検出している。円形に近い掘り方で上縁径28cm、底径26cm、深さ70cmを計り、内部には柱の立ち寄れ跡と考えられる土層の変化があった。それによると柱は径約21cmの円柱ではほぼ垂直に立てられ、その周囲には掘り方との間隙に詰め土がなされていたことが知られる。竪穴内における堆積土は順次流入した状態で、床面から黄褐色粘砂土・暗黃褐色土・赤褐色粘砂土・茶褐色粘質土・暗赤褐色粘質土・茶褐色粘砂土となっており、本跡が廃棄後、自然に埋没していたことを示していた。

**出土遺物** 茶褐色粘質土から検出された弥生式土器（第7図）には、型1、高环1のほか、器台脚端部と底部の破片がある。まず1はくりあげ口縁を有する變形土器で、口径14cmを計る。短かく内傾し口縁部には外面に3条の細い偽凹線文がめぐり、頭部には箒状工具による割突文列が施されている。調整は頭部以下の内面を縱方向にヘラ削りし、底部は内面ヘラ削り、外側ヘラ磨きを行なう。焼成はもろく赤褐色を呈し、胎土中には粗砂粒と若干の靄母を含む。なお器面には炭化物の付着が認められる。2は器高12.5cmの高环で口縁は上端が内側に折れ曲がって内傾し、口径12.9cmを計る。脚部は太く、外側には7条か



第10図 竪穴式住居跡出土土器実測図

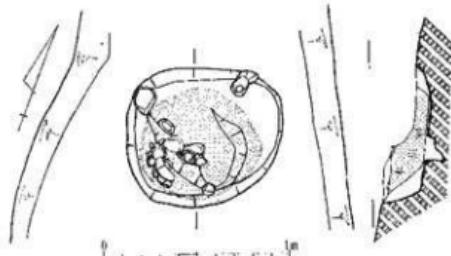
らなるヘラ描沈線が横方向に上下2段に施され、下段にはこれと直交する6条のヘラ描沈線がみられる。环部外側は横方向のヘラ磨きがなされるが、内面には成形時の指頭圧痕をそのまま残す。脚部は外曲線方向のヘラ磨き、内面横ヘラ削りを行っている。黄褐色を呈し、砂粒を含む。この高环は筒脚部と环部を中空に作ったのち、径約7cmの円形粘土板を貼付してこれをふさぎ、环の底を作っている。3は器台あるいは大形高环の脚端部とみられるもので、端部が内傾して外間に細い4条の偽凹線文を入れる。黄灰色を呈す。4はしっかりした平底の破片で、これも黄灰色を呈す。3、4とも器面の風化が著しく、調整は不明で、いずれも胎七に多量の砂粒と若干の鐵母を混じ、焼成はもろい。

### 3. その他の遺構と遺物

以上のほか3号墳の北西8mで土壙1を検出した。

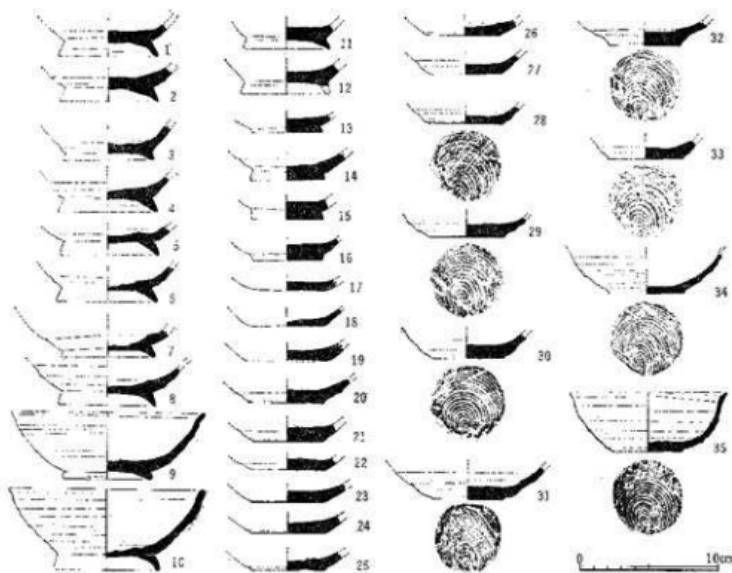
**構造** 不整な円形プランを有する土壙で、上様の長径0.83m、短径0.75mを計る。壁高は南側で20cm、斜面にかかる北側では5cmである。壙底には浅い掘り込みがあり、さらに4つの小ピットが穿たれている。床面はわずかに北に向って傾斜し、壙内の層位は床面より炭化物を含む赤褐色土層、黒色純炭化物層、茶褐色七肩の頸になっており、炭化物層の上面、すなわち、茶褐色土層内で多量の土師器环の出土を見た。これらは底部を下にして重ねられたり、底を逆位にして出土するものが目立った。

**遺物** 土壙内から出土した土師器环は個体数にして37個体分ある。これらは高台をもつもの（第12図1～12、16～19）とそうでないもの（13～15、20～35）の2種に大別され、さらに高台付のものにはつけ高台とベタ高台の2種がある。底部はいずれも糸切り手法によって切り離されているとみられるが、高台のつかないものの中には一部風化その他で糸切り痕の判然としないものもある。すべて水拭きによって成形され、环部にはロクロビキのあとをとどめる。つけ高台を有するもの（1～12）のうち光形に復し得る9・10は、环部をロクロ上で一氣につくり、糸で底部を切り離した後、高台を貼付している。9は环部と高台、10は高台のみをさらに水拭きによって調整している。ともに11縁部がわずかに外反し、11径14cmを計る。16～19はベタ高台を有するもの



第11図 土 壙 灰 圖 図

部をロクロ上で一氣につくり、糸で底部を切り離した後、高台を貼付している。9は环部と高台、10は高台のみをさらに水拭きによって調整している。ともに11縁部がわずかに外反し、11径14cmを計る。16～19はベタ高台を有するもの



第12図 土壙内出土土器器実測図

で円板状の高台から坏部まで一気にひきあけ、糸切りしたものである。高台のつかない平底の坏もロクロで一気に成形した後、糸切りしたもので、特に34・35はロクロビキのあとが顕著で器肉が薄く、全体にシャープなつくりとなっている。全形の窺える35は坏部がやや内縛して深く、口端部はするどく、わずかに外反し口径11.3cmある。色調は淡黄褐色ないし黄灰色を呈するものが多く、いずれも胎土は精選されて砂粒を含まない。

なお、平底坏の底部には明らかに糸切り後についたとみられる2～3本の刻線の認められるもの(28～30、31～34)がある。これは窓入れの前、生乾きの段階で乾燥台から取りあげる際に付着したキズであろうか。

これまで山陰ではこの種の坏について十分な検討がなされていないので的確な時期判定は難しいが、つけ高台が外傾して高く、作りも入念であることなどから、ここでは一応中世以前のものと考えておきたい。

## 5 小 結

以上、大坪古墳群のうちこの度調査の対象となった3号墳についてその調査結果を記しててきたが、ここでは調査によって得られた知見のうち特に注目すべき2、3の問題点と今後の課題について若干の私見を述べ結びとしたい。

大坪3号墳は径13m、高さ2mの小規模な円墳で、埴輪・葺石等は見られなかったが、内部施設として墳央部に2つの木棺直葬土壙があり、他に墳崩部から土壙1が検出された。墳央部の埋葬施設については盃掘などにより、その前後関係は不明であったが、2つが並行して計画的に設けられていることから、両者の間には大きな時期差ではなく、相前後して営まれたものと考えられた。このうち第1主体は素掘りの土壙に屍体を置き、須恵器大形盃の破片でこれを被覆するものであった。

このような埋葬方法は今のところ当地方では類例が極めて少く、わずかに先に報告した松江市矢田町才ノ峰1号墳に類似したものがある程度にすぎない。もっとも、前期古墳には七器を納器とする例がかなりあり、飯石郡三刀屋町松本1号墳、<sup>(註4)</sup>安来市吉佐町八幡山古墳<sup>(註5)</sup>、<sup>(註6)</sup>米子市青木F2号墳などで土師器櫛棺が知られている。また、時代は下るが横穴等において、須恵器を破砕し、これを玄室床面に敷き並べ須恵器屍床とした例も出土にはかなり見られる。資料の増加を俟って検討すべき問題であるが、上師器櫛棺、須恵器の破片で遺体を被覆した構造、須恵器屍床との間には、あるいは一定の系統性がたどれるかもしれない。

第2主体は、第1主体と同様素掘りの土壙で、塹内に断面U字形の舟底形木棺を安置し、塹上でこれを固定したと考えられるものであった。これに対して、墳裾部から検出された土壙は、不整な複円形プランを行する小形土壙である。3号墳は築造の際、墳裾の地山に切削加工を加えているが、この土壙は地山の加工後に掘り込まれていていることを調査によって確認している。塹内には土師器壺、土師器窓坏、須恵器脇が埋置しており、うち土師器壺には赤色顔料が捺布してあった。これらは、いずれも欠損したりして、破片の状態で出土し、完形を保つものは1点も見られなかった。おそらく、意識的に破砕し、埋置したものであろう。米子市福島遺跡日焼山七墳墓群においても、土壙のかたわらから、無秩序な土師器片の集積が注意されている。<sup>(註7)</sup>また、安来市佐久保町永神古墳、同西赤江町宮山6号墳<sup>(註8)</sup>などでも墳裾に土器の集積、あるいは土壙の存在が確認されている。こうした例からすると、土壙を破砕し、埋置することは埋葬儀礼に際して重要な意味をもつ行為であったで

あろうか。次に第1主体と墳掘土壙から検出された七輪器と須恵器を手懸かりに本墳の築造年代について考えてみたい。第1主体出土須恵器大形壺のうち一つは内外ともタタキ目が人念に磨消され、墳掘土壙出土の小形壺も頸部が短かく口縁端部が二段に作らるなど、ともに古い様相を備えるものである。先に記したように第1主体と墳掘土壙との間には時期差がみられるが、須恵器に型式差が現われる程のものではなく、両者とも山陰の須恵器編年の第I期の範疇に含まれるもので、この時期の標識とされる松江市西川津町金崎1号墳、同<sup>(注10)</sup>菅田町篆師山古墳、安来市門生町高畠窯址などの出土須恵器と共に要素を備えている。<sup>(注11)</sup>また墳掘土壙から川土した七輪器も篆師山占塗の直口壺及びI期の須恵器を伴う安来市鳥木町御立山第1群4号墳の高环と類似するものである。ただし、詳細に観察すると3号墳川土の須恵器は古い様相の中に一部新しい様相も混えていることが注意される。例えば、第1主体出土のいま一つの大形壺は篆師山古墳の中形壺あるいは高畠窯址の壺鈕類と比較すると全体にシャープさを欠き、また口頸部を飾る文様帶が鋭い凸帯と緻密な波状文の組合せから変化し凹線と櫛構波状文で構成されていること、さらにタタキ目が十分に消去されずに残っていることなどがそれである。第1主体出土の高环形大形器台も古式様相の能義郡伯太町出土の同形品に比べ作りが全体に甘く、环部も浅くなつて、大形壺同様环部と脚部の文様帶も凹線で区画されている。これらの特徴は同一時期における窯や工人の相異から来るバラエティーというより、むしろ時間差による相異と考えた方がよかろう。3号墳では須恵器編年の上で、主なメルクマールとされる壺环や高环は出土していないが、山陰の須恵器のI期は今後さらにいくつかの小期に細分する必要があるものと考えられる。

<sup>(注15)</sup> 大阪府陶邑古窯址群においては、I期を5世紀から6世紀前半に位置づけ、地方窯は海邑の初期須恵器より1時期遅れて出現するものとされている。今、仮にこれを肯定するとすれば先の高畠窯址は概ね5世紀末から6世紀初頭に開始されたものと考えられ、本墳はこれに極めて近い時期の築造とみられる。いずれにしても、今回得られた一群の須恵器は今後山陰の古式須恵器を再検討していく上で、良好な資料を提供したものと言えよう。

ところで、大坪丘陵に分布する他の5基も3号墳と同様円墳と考えられるもので、大坪古墳群はすべて円墳によって構成されていることが注意される。同じく東出雲と言っても西部の松江平野周辺では当該時期の古墳群が大方円墳と前方後方墳からなつてゐると対比して興味深いところである。

次に墳丘の北東から竪穴住居跡1棟を検出している。調査区の関係で堅穴のすべてを検知していないが、円形プランを呈すると考えられるものであった。出土土器のうち壺形土

器はくりあげ口縁を有し、肩が強く張って以下直線的に下降し、しっかりした平底に終るものである。頸部以下の内面には弥生中期後半のハケ目調整に対比されるヘラ削りが認められる。また、器台形土器の脚端部と見られるものは山陰で九重式土器と呼ばれる1群の弥生終末期の器台に比べ、端部が短かく内傾するもので、細い擬凹線文をめぐらしている。これらから本跡出土の土器は弥生後期前半に属するものと考えられる。この時期の堅穴住居<sup>(註16)</sup>跡は米子市青木遺跡などで全形をうかがえるものが若干知られているが、それらはいずれも円形プランを有するもので、その在り方は本跡と共に通する点が多い。安来平野でもこれまで僅少ながら八勝谷・瀬戸山・叶谷遺跡など、弥生中期後半から古墳時代初期にかけての住居跡が調査されている。これらはいずれも眼下に水田をひかえた標高20~30mの丘陵上に営まれており、この度大坪丘陵で検出された堅穴住居と同一の立地条件を備えている。水田を挟んで大坪丘陵の東側には本跡とほぼ同時期に九重5・7号七墳墓などが営まれているが、こうしたことなどを含めて、今後安来平野における当該時期の集落立地とその在り方等についてさらに検討していく必要があろう。

註1 内田才、東森市良、近藤正「安来平野における土墳墓」『上代文化』36號（昭和38年）

2 註1と同じ

3 三宅博士氏調査（昭和50年）

4 島根県教育委員会『松本古墳調査報告』（昭和38年）

5 山木清「小規模古墳について」『山陰古墳文化の研究』所収（昭和46年）

6 大村俊夫「青木遺跡の深渡運動」『考古学研究』18卷第3号（昭和46年）

7 山陰考古学研究所『福井遺跡の研究』（昭和44年）

8 前島己基、内田才氏調査（昭和47年）

9 島根県文化財保護協会『宮山古墳群』（昭和49年）

10 山木清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収（昭和46年）

11 山木清「島根大学歴史系考古学部山古墳遺物について」『山陰古墳文化の研究』（昭和46年）

12 安来市教育委員会『安来市誌』（昭和45年）

13 山木清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』所収（昭和46年）

14 伯太町教育委員会『伯太町史』（昭和37年）

15 平安学園寺店クラブ『陶邑古窯址群』（昭和41年）

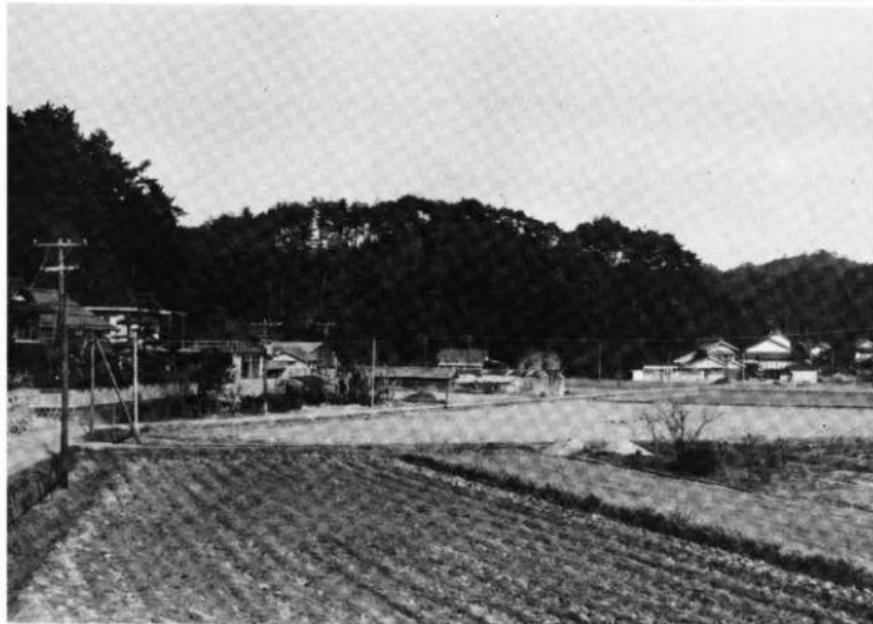
16 註1と同じ

17 註6と同じ

18 内田才、近藤正「八勝谷遺跡調査報告」『上代文化』33號（昭和38年）

19 註12と同じ

図版 I 大坪古墳群



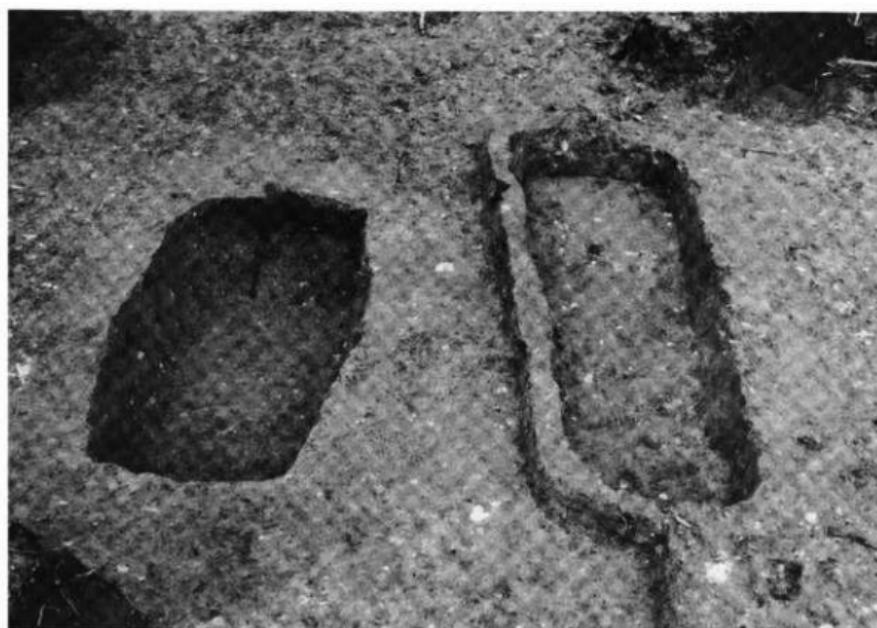
1. 古墳群遠景（西から）



2. 3号墳発掘前の墳丘（北から）



1. 発掘後の墳丘（南から）



2. 第1(左)、第2(右)主体